

第43回「全日本中学生水の作文コンクール」
入賞作文集

水について考える

主催 水循環政策本部・国土交通省・都道府県
後援 文部科学省・厚生労働省・農林水産省・経済産業省・環境省・
全日本中学校長会・水の週間実行委員会・独立行政法人水資源機構



「健全な水循環」

ロゴマーク

第43回 全日本中学生水の作文コンクール について

水は人間や動植物といったあらゆる生命の源であり、社会経済活動に欠かすことのできない最も基礎的な資源であり、限りある資源でもあります。

「水の日」及び「水の週間」は、水の大切さや水資源開発の重要性に対する国民の関心を高め、理解を深めるため、昭和52年の閣議了解により政府が定めたものです。年間を通じて水の使用量が多く、水についての関心が高まる時期である8月の初日を「水の日」（8月1日）とし、この日を初日とする一週間（8月1日～7日）を「水の週間」として、水に関する様々な啓発行事を毎年実施しております。

この「全日本中学生水の作文コンクール」は、昭和54年より「水の日」・「水の週間」行事の一環として、次代を担う中学生の皆さんに、日常生活での体験あるいはご家族や先生方から学び聞いた話などをもとに、「水について考える」というテーマで実施しているものです。

平成26年3月に水循環基本法が成立し、8月1日は法律で定められた「水の日」となりました。このことから、「全日本中学生水の作文コンクール」を政府全体の取組とするため、最優秀賞に内閣総理大臣賞を、優秀賞に関係省大臣賞を創設したところです。

今回は、全国の中学生から13,025編（学校数351校）の応募があり、自らの体験を通じ日常生活における水の貴重さを表現したもの、美しく豊かな水を未来へ受け継いでいくために水を大切にしていこうという気持ちが表現されたもの、過去に各地で発生している地震や豪雨災害等の経験を通じて水について考察したもの等がありました。

このたび、入賞作文39編を作文集にまとめましたので、多くの方にお読みいただき、学校やご家庭において、「水」について考えるきっかけとしてご活用いただければ幸いです。

最後に、作文コンクールの実施にあたり、応募された中学生の皆さんや担当の諸先生方、またご多忙のところ審査をいただきました審査委員の先生方に厚くお礼申し上げますとともに、ご協力いただきました文部科学省、厚生労働省、農林水産省、経済産業省、環境省、都道府県、全日本中学校長会、水の週間実行委員会及び独立行政法人水資源機構等関係の方々には深く感謝申し上げます。

令和3年8月

国土交通省 水管理・国土保全局 水資源部

「水の日」・「水の週間」について

「水の日」及び「水の週間」については、昭和52年5月の閣議了解を基にその行事等を実施して参りました。諸行事の実施により我が国の水問題の解決を図り、もって国民経済の成長と国民生活の向上に寄与することを目的に、年間を通じて水の使用量が多く、水について関心が高まっている8月の初日である8月1日を「水の日」、この日を初日とする一週間を「水の週間」としております。

「水の日」及び「水の週間」について

閣議了解
昭和52年5月31日

水資源の有限性、水の貴重さ及び水資源開発の重要性について国民の関心を高め、理解を深めるため、「水の日」を設ける。

「水の日」は毎年8月1日とし、この日を初日とする一週間を「水の週間」として、この週間において、ポスターの掲示、講演会の開催等の行事を全国的に実施するものとする。

上記の行事は、地方公共団体その他関係団体の緊密な協力を得て行うものとする。

平成26年3月に水循環基本法が成立しました。本法律では、水が健全に循環し、そのもたらす恵沢を将来にわたり享受できるよう、水循環に関わる施策を包括的に進めていくことが不可欠であるとされました。また、同法第10条において、「水の日」が8月1日と規定され、国及び地方公共団体は水の日趣旨にふさわしい事業を実施するように努めなければならないとされています。

水循環基本法（平成二十六年法律第十六号）

（水の日）

第十条 国民の間に広く健全な水循環の重要性についての理解と関心を深めるようにするため、水の日を設ける。

2 水の日は、八月一日とする。

3 国及び地方公共団体は、水の日趣旨にふさわしい事業を実施するように努めなければならない。

全日本中学生水の作文コンクールは、広く国民が水の重要性についての理解と関心を深めるための普及行事として、「水の日」・「水の週間」行事に位置付け実施しているものです。

最優秀賞 (一編)

《内閣総理大臣賞》 私の夢と大切な水

優秀賞 (九編)

《厚生労働大臣賞》 『エコ』の意義

《農林水産大臣賞》 豊かな暮らしをいつまでも

《経済産業大臣賞》 父と私をつなぐ水

《国土交通大臣賞》 「共助」の遺産

《環境大臣賞》 私達が担うべき使命

《全日本中学校長会会長賞》 「あいにく」

《水の週間実行委員会会長賞》 「あの子達を救いたい」

《独立行政法人水資源機構理事長賞》 「四国四県、友情の水」

《中央審査会特別賞》 潤う未来

入選 (二十九編)

岩手県 岩手県立一関第一高等学校附属中学校 二年 島山 史子

福島県 会津若松市立一箕中学校 二年 塚田 暖菜

茨城県 土浦日本大学中等教育学校 三年 網永 莉々

茨城県 筑西市立下館中学校 二年 藤代 かりす

群馬県 群馬大学共同教育学部附属中学校 三年 豊田 楓芽

群馬県 渋川市立渋川中学校 二年 高橋 ヒカル

群馬県 群馬大学共同教育学部附属中学校 二年 矢内 沙弥

千葉県 千葉市立幕張中学校 二年 佐藤 夏帆

東京都 東京都立富士高等学校附属中学校 一年 福田 万結

東京都 足立区立花保中学校 一年 坂井 純

神奈川県 神奈川県立戸出中学校 三年 中井 結奈

富山県 高岡市立戸出中学校 三年 稲場 結奈

愛知県 名古屋女子大学中学校 三年 大和田 典子

三重県 高田中学校 一年 富永 麻央

目次

宮崎県 延岡市立恒富中学校 三年 永谷 和希 1

兵庫県 兵庫教育大学附属中学校 二年 小寺 良菜 2

香川県 高松市立香川第一中学校 二年 溝渕 朔也 3

福島県 会津若松市立一箕中学校 三年 佐藤 空成 4

沖縄県 栗国村立栗国中学校 三年 小谷 杏奈 5

新潟県 新潟県立燕中等教育学校 三年 羽賀 詩彩 6

熊本県 甲佐町立甲佐中学校 三年 豊永 はる 7

愛知県 豊橋市立本郷中学校 二年 中村 光里 8

香川県 香川大学教育学部附属高松中学校 三年 溝口 真央 9

鹿児島県 喜界町立喜界中学校 三年 喜禎 あさひ 10

京都府 八幡市立男山東中学校 三年 井口 慎之介 26

京都府 京都市立向島秀蓮小中学校 九年 村川 和 27

大阪府 大阪教育大学附属池田中学校 三年 藤山 ゆかり 28

奈良県 奈良県立青翔中学校 三年 小林 大悟 29

和歌山県 和歌山県立田辺中学校 三年 寺段 愛良 30

広島県 近畿大学付属広島中学校 三年 山下 結 31

周南市 周南市立桜田中学校 三年 村上 莉華 32

福岡県 今治市立伯方中学校 三年 宇野 千紜 33

福岡県 福岡教育大学附属福岡中学校 三年 村上 誠洋 34

佐賀県 佐賀市立川副中学校 二年 轟 貴博 35

佐賀県 佐賀市立北山中学校 二年 田中 美羽菜 36

熊本県 御船町立御船中学校 三年 寺田 俊太郎 37

宮崎県 宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校 二年 三浦 世来 38

フランス サンジヨセフ校 三年 中田 柚 39

資料

第四十三回「全日本中学生水の作文コンクール」募集ポスター

第四十三回「全日本中学生水の作文コンクール」概要

第四十三回「全日本中学生水の作文コンクール」地方審査等優秀者名簿

第四十三回「全日本中学生水の作文コンクール」応募状況の推移

内閣総理大臣賞（最優秀賞）

私の夢と大切な水

宮崎県

延岡市立恒富中学校

三年

永谷

和希

私は将来、和牛繁殖農家になろうと思っている。繁殖農家の仕事は母牛の世話をして、良い子牛を産ませ市場に出荷することだ。良い和牛を育て、和牛のオリンピックに出場すること、品評会に参加して良い成績を取ることも私の夢である。私がこの様に考えるのは、祖父の影響が大きい。私の家は、稲作と和牛の繁殖農家をしていて、現在も五頭の母牛と三頭の子牛を飼育している。私自身も幼いころから祖父の手伝いをしてきた。祖父の育てた子牛は百万円以上の値をつけたこともあり、いつか祖父を超える繁殖農家になることが私の目標である。良い牛を育てるために大切なのは、日々の餌やり、手入れ、良い健康状態を保つことだと思っている。私の家では、地下四十三メートルから地下水を引き、除去装置を使つてろ過した軟水を、家族も牛も飲んでる。この水と、それを利用して育てた米や野菜のお陰か、私自身も大変健康で、小学校・中学校を通して、無遅刻、無欠席で過ごせている。人間同様、牛にとつても、良い水と安全な餌が大切なことは言うまでもない。特に、牛はしゃべることができないから、人間が良い水と餌を選んで与えることが大切になってくる。牛の餌は牧草と稲わらだ。稲わらは、もちろん田植えをして米を育て、収穫した後のわらである。米や牧草を育てるためにも、安全な水は欠かせない。また、日光や雨も農業にとっては必要不可欠のものである。まさに水は植物・動物の命の源だと思ふ。

水の循環について学び、調べてみると、地球上の水の総量は、およそ四十億年前からはほとんど変わっていないという。日本は豊かな水資源に恵まれていて、蛇口を開けば安全な水が出てくるのが当たり前だが、これは決して世界の常識ではないことを忘れてはいけない。日本人は飲食・入浴・洗濯・水洗トイレなどで、一人当たり一日約二百九十リットルもの水を使っているそうである。その一方で、世界では約七億人の人々が生きていくために必要最低限の三リットルの水すら手に入らず苦しん

でいるという。さらに調べると、実は、日本は国土が狭く人口が多いため、国民一人当たりの水資源量は世界平均の二分の一程度しかなかった。この現実をしつかり受け止め、私たちは、水の大切さをもう一度考え直さなければならぬ。無駄をはぶく意識もしつかり持って生活しなければいけないと思う。私たちが使った水が循環し、世界のどこかの人のためになると思うと、水をきれいな状態で循環させることも考えなければいけないだろう。

私の通う学校では、通学中のごみ拾い運動を行っている。小さな活動だが、もし日本中の中学生がこの活動をして、一人一つのごみを拾うだけでも、一日約三百二十二万個のごみがなくなることになる。毎日行えば、その三百六十五倍だ。小さな活動も、決して小さなことではなくなると思う。歯磨きの時に水を流しっぱなしにしないことも同じだろう。日本中の家庭が、生活用水の節水を行ったり、生活排水を少しでも減らし、きれいにする努力を行ったりすることの大切さをあらためて考えさせられる。今、プラスチック製品の減量が進められ、私たち中学生でも買い物にマイバックを持参するようになった。水を守るためには、水だけでなく、空気や土壌も守らなければならない。それは、自然環境のすべてが連鎖しているからだ。

和牛繁殖農家になるという夢の実現のためにも、私は環境問題に興味を持ち続け、水を守るために自分にできる小さなことをやり続けようと思っている。将来、私が育てる牛も、おいしい井戸水で健康に育ってほしい。五年に一度の和牛オリンピックで、前回は鹿児島県に総合優勝を奪われたが、「宮崎牛」がずっと日本一を守り続けられるように頑張りたい。

厚生労働大臣賞（優秀賞）

『エコ』の意義

兵庫県 兵庫教育大学附属中学校 二年 小寺 良菜

友人と電話で話していた時のことだ。去年から全世界にはやりだしたコロナについて、お互いにぐちづっていたのだが、

「でも、コロナがはやって良かったなと思う事もあるよ。」
と友人が言い出した。

「それは何？」

と尋ねると

「お母さんが水の使い方に関する言わなくなった事。」

と言う。友人の母親は、日頃から水の使い方についてとても細かく、ことあるたびに『エコ』を連発するそうだ。

「夏の暑い日、部活から帰ってきて、汗まみれの体をたっぷりのシャワーで洗い流したいなって思っても、水を使い過ぎるからダメって言われるんだ。」

彼女は以前からよく言っていた。だが、それがコロナとどうつながるのか。

「コロナがはやったおかげで、市町村の特別措置で、六ヶ月間、水道代が無料なんだ。だからどんなに水を使ってもタダ。それでお母さん、あまりうるさく言わなくなったんだ。」

なるほど、納得だ。無料ならいくら使っても文句を言う人はいない。「良かったね。」

そう言って電話を切った。

それなのに、なぜかすっきりしない。モヤモヤした気持ちをかかえたまま、お母さんにその話をした。するとお母さんは言った。

「そうねえ、私も家計をやりくりしているからそのお母さんの気持ちはよく分かるわ。でも、一歩下がって、もう少し大きな視野で考えてみると、自分の家計に影響がないからよし、とするのは違うかな。地球規模で考えたら、資源には限りがある。だから、『エコ』は自分の家計の支出

をおさえるためだけのものではなく、地球の資源を、ひいては私たちの未来を守るために必要なことだと言えるわね。それに気付くことができれば、水道代が無料になるうとなかろうと、やることは同じなのではないかな。」

ああ、それだ。私のモヤモヤの原因は。私は学校で資源に限りがあると習った。それは水だけではない。石油も、土地も、木材も、何もかもだ。私たちは地球という限られた枠の中で生活している。そこに存在できる物の量は決まっている。それらの資源は、私たち人間だけではなく、地球上に生きる全てのものたちと共に分かち合っていかなければならない。大切な資源を守っていくために、私にできる事は何だろう。中学生である私たちには、経験や知識も財産もない。地球の資源を守りぬくなんて、そんな大きな事を言えるわけがない。でも、それでもできる事がある。それが『エコ』だ。必要以上に使わない。大切に使う。無駄にしない。その小さな一つ一つの行動が、今の私たちにできる最大の資源を守るための行動だ。

きっかけは「水道代が高いからもっと水を使う量を減らそう」で良いのだと思う。実際に、それが一番手っ取り早く、水の無駄遣いを減らす行動につながるのではないか。人は自分の利益に関わることには、とてもびん感だ。常に意識し、継続的に行動することもできる。でもそれだけでは足りない。『エコ』は、個人の利益のためだけではなく、地球を守るための行動でもあるという事を、どこか心の片隅に置いておかなければならない。今のところ私たちは地球以外では生きていけない。すなわち、私たちの運命は地球と共にあるという事だ。地球が減びると私たちが滅びる。地球がいつまでも水資源の豊かな星であるという事は、私たちが生きていく上でかけがえのない利益につながっていく事はあきらかなのだから。

農林水産大臣賞（優秀賞）

豊かな暮らしをいつまでも

香川県

高松市立香川第一中学校

二年

溝淵

朔也

僕は野球の練習の時に、冷たい水を飲む。一気にのどが潤されて元気が湧く。そして家に帰ってまっ先に向かうのがシャワーだ。暑い夏、やや冷たいシャワーを頭からかぶる。ほてった体が一気に冷やされて、最高に気持ちが良い。

また、僕は自転車に乗る事が好きだ。学校周辺を走るだけでも、二、三個ため池を見る。十分程走るとまた次のため池が見える。日本で一番狭い県なのに、なぜこんなにもため池が多いのだろうか。どうしてこんなにため池が必要なのだろうか、ずっと不思議に思っていたので調べてみることにした。

僕が住んでいる香川県は、全国に比べて降水量がとても少ない県だ。昔から水不足に悩まされていて、雨が全く降らず日照り続きだったため、田んぼはひび割れていた。その上、川が短く急なため、せつかく雨が降ってもすぐ海に流れてしまう。そこで、一時的に水をためておけるため池が必要だった。県内のため池はとて多く、全国第三位。その数はおよそ一万二千箇所もあり、まさにため池王国だ。香川用水ができた今でも、農業用水の五十二パーセントをため池などに頼っているそうだ。

僕が通っていた浅野小学校では、毎年「ひょうげフェスタ」と呼ばれる行事がある。江戸時代に、香川県のほとんどのため池に携わったといわれている「矢延平六」さんをしのび、感謝するお祭りだ。

となりの川東にある「新池」は平六さんが作ったため池の一つだ。川東は土地が高いため、浅野全体に水が行き渡り、米や野菜、果物がよく育つようになった。ため池作りの中で一番苦労するのが、地面や堤防を固める事だ。僕も小学四年生の時に体験したが、機械がなかった時代に石や杵を使って地面を固めるのが、とても重く、少ししただけで僕は汗だくになってしまった。十一年もかけて新池を作り上げた当時の大変さを実感した。

台風が来たり、大雨が降ったりして池の水位が上がった時には、毎回のように堤防が切れ、修理をした。その度に堤防を更に強くし、ほんらんを少なくしたのだった。

今でも昔の伝統を受け継ぎ、浅野では、米の豊作を願う「ひょうげ祭り」が行われる。顔に色とりどりの化粧をして、新池まで練り歩き、最後には、神輿ごと新池に飛び込んでファイナーレを迎える。そこで、初めて見た光景に僕は驚いた。

新池に巨大なソーラーパネルがたくさん設置されていて、太陽光発電もしているのだ。家の屋根や、山の斜面に設置されているのはよく見ることが、池に浮かべると、色々なメリットがあるらしい。

木の伐採が無く、緑を残せるし、平らな水面にソーラーパネルを浮かべるだけなので、とても簡単だ。それに地震にも強そうだ。

新池の水面で、太陽の恵みと人の知恵を借りて電気を作り出せるなんて、すごい事だと思った。それもさかのぼれば、平六さんが苦労して作り上げたため池のおかげだ。

新池について深く調べてみると、矢延平六さんを含め浅野の水不足解消に携わった人達の苦労や工夫がよく分かった。だからこそ、水を一滴も無駄にしないという事を常に心掛け、「節水」に努めていくとともに、水への感謝の気持ちがよりいっそう強くなった。

今の僕にできるのは、この平六さんの偉業を次の世代に受け継ぎ、いつまでもきれいな水が飲め、おいしいお米や野菜が食べられる今を未来へ届けることだと思ふ。そのためには、池や川、海などの自然を汚さず、美しさを保てるように、今ままであまり興味なかった地域の清掃活動にも積極的に参加してみようと思ふ。

僕は今日も、野球の練習の時に水を飲む。今日の水は、いつもより一段とおいしく感じた。

経済産業大臣賞（優秀賞）

父と私をつなぐ水

福島県 会津若松市立一箕中学校 三年 佐藤 空成

「水」と聞いて私が真っ先に思い浮かべるのは、父の存在だ。

今の日本は蛇口をひねるだけで、安全でおいしい水が出てくるのが当たり前だ。しかし、世界では、安全な水が手に入らない国の方が多いと言われている。だからこそ、私達は水を大切に、そして、感謝しなければならぬものだ。と知っているはずだ。しかし、私にはもう一つ知ってほしいことがある。それが、私の父の存在だ。

私の父は、福島県の大川ダムで働いている。大川ダムでは、災害を防ぎ、私達の生活に欠かせない飲み水や、農業用水を蓄えている。他にも、水力発電を行い、私の住む会津若松市や、東北、東京にも電気を送っている。私の父は、

「皆にとつてなくてはならない仕事なんだ。」と、教えてくれた。父は自分の仕事にやりがいを感じ、責任をもって仕事をしている様子を、その時強く感じた。そんな仕事をする父を、私は誇りに思う。しかし、たった一度だけ、父が働く理由が分からなくなってしまったときがあった。

二〇一九年、十月十二日、台風十九号が、日本列島を直撃し、日本に甚大な被害をもたらしたことを、覚えているだろうか。その時、福島県は、大雨特別警報が発表され、雨が地面を叩き付ける音が響き、木が倒れてしまいそうなくらいの強風が吹いていた。そんな中、父は大雨で川が氾濫しないよう、ダムへ向かった。こんな時に出かける父を見送って、私は不安で押し潰されそうだった。父が留守の今、長男である自分が家族を守らなくてはいけないと分かっていて、分かってはいたが、心の中では父が私のそばにいてくれたら、どんなに安心だろうななどと思っていた。父が皆のためにしている仕事を、皆は知っているのだろうか。父は大丈夫だろうかと心配で仕方がなかった。しかし、いつでも避難ができるよう、準備をするために歯磨きをしようと思った。歯磨きをするために蛇

口をひねった。いつもと何一つ変わらない水、そう思っていたが、そのときは何かが違うような気がした。私はすぐに、それが何か分かった。同時に、なぜ今まで気付かなかったのだろう、とも思った。蛇口から出てくる水は、ずっと私と父をつないでくれていたのだ。父が私達のためにダムに蓄えて置いてくれた水が、蛇口をひねること、私のもとへ届く、そう気付いたとき、私は一人ではないと思えた。今、父は私達の命を守るために必死に働いてくれている。ならば、私も何かしなければならぬ、そう思い、力強く蛇口をしめた。

それから、何度も何度も、記録的な大雨が日本を襲った。その度に、父は休みであろうと、仕事へ向かう。そして、私はその度に、父を尊敬する。

私にとって水は、父の思いやりが詰まった大切なものだ。それは、私だけではなく、日本国民全員に共通することだと思う。だからこそ、水を無駄にはいけないのだ。ただの水かもしれないが、そのただの水には、ダムや浄水場などで働く人達の思いやりや願いが込められている。そのことを、私はもつと多くの人に知ってほしい。今まで私は、水を大切に扱い、感謝してきた。それ以上、自分にできることは何もないと、勝手に決めつけていた。しかし、今の私は、中学生の私だからこそできることに気づかされた。それは、水に感謝できるのは、誰かの努力があるからだということ、水を大切にできるのも、誰かが大切にできるような存在の水にしてくれたからだということ、この作文を通して、いろいろな人に発信していくことだ。

新型コロナウイルスから日常を取り戻すために、これからも水で手を洗おう。そうすれば、明るい未来がやって来るだろう。大雨の後、空に大きな大きな虹が架かるように。

国土交通大臣賞（優秀賞）

「共助」の遺産

沖繩県 粟国村立粟国中学校 三年 小谷 杏奈

「このトゥーヅに溜めた雨水を飲んで衛生的には大丈夫だったんですか？」「このような大きな石をどこから持ってきたんですか？」

観光客が質問してきます。しかし、私はきちんと答え返すことができず、活動を開始した。中学生で島のボランティアガイドをしよう！そうして、活動をスタートさせた私達。中学生の目線で、島のエピソードを集め、ありのままに島をガイドすることにしました。そのエピソードの一つが、島の文化遺産とも言えるトゥーヅについての紹介をするということです。

「このトゥーヅは、水道がない頃に、雨水を溜めて使っていた入れ物です。現在でも粟国島にはこのトゥーヅが残っている家が多いです。トゥーヅについての歴史を調べていくと水道がない時代の島の苦勞を知ることができます。今では、きれいな水草を活けたりして、庭のちよつとしたアートになっていたり、溜めた水を庭の草花への水やりに使ったりしています。」

このように説明していた私たち中学生ボランティアガイドの誰もが、改めて島の水の歴史について、何も分かっていなかったことを思い知らされました。

私は初めて祖母に聞きました。祖母の幼少期の体験は、今の私の生活から想像もできないものでした。

「近くの溜め池から水を汲み、一斗缶（18ℓ）に入れ、家まで運んでくるのが毎日だった。」「片道20分の道をトゥーヅが満杯になるまで何回も往復した。」「お風呂は毎日入れない。貴重な水だから毎日のお風呂に使うのはもったいない。」「雨が降ったら外に出て髪を洗った。」「夏は海で体を洗った。」

自分達の住んでいる粟国島が、昔から水資源に恵まれず、島民たちは水を確保するためにとても苦勞してきたことを祖母は語ってくれました。生活を支えるために、一日一日に必要な水を汲み、運んでいた祖母の必死な様子が伝わってきます。

「トゥーヅ」は水を溜める容器のことです。丸みを帯びていて巨大

なお茶碗のように見えます。島の西海岸にある凝灰岩をくり抜いて造られ、大きいものでは約1トンもあつたそうです。その重い石を運ぶために島の大人たちが数十人集まり交替しながら、船も使い、約七〇人を超える人手が必要なこともありました。多くの人の苦勞と時間をかけて運び造られたトゥーヅは、大切な財産として親から子へ代々受け継がれ、今もなお島のあちこちの庭先で見ることが出来ます。トゥーヅは島民が力を合わせて造った、水資源を確保するための大切な容器だったのです。

今、世界はコロナパンデミックをどのように乗り越えていけばいいのか、大きな課題と向き合っています。感染を防ぐために、手洗いの徹底など、衛生面の予防対策も必要です。しかし、世界人口の約10人中3人の割合で、安全な水の確保が難しく、手洗いの水以前の問題の方が深刻です。汚れた水が原因で命を落とす子どもたちもいるのです。かつての祖母のように、今でも世界では、幼い子どもたちが手に入るかわからない水を求めて歩き続けている状況があります。私の住む粟国島の先人達は、厳しい島の自然条件や生活環境の中でも、お互い助け合ってコミュニティを築いてきました。それを象徴しているのがトゥーヅづくりだと思えます。一つ一つが重くて巨大なトゥーヅは一人でつくることは困難でした。多くの人々の協力がないとできないことだったのです。

自分一人だけの安全や安定だけを求めず、水資源を確保するために、「共助」の心を持つて先人達が造り上げてきた「トゥーヅ」。私達がこれからの時代を生き抜くための大切なメッセージを伝えていきます。

環境大臣賞（優秀賞）

私達が担うべき使命

新潟県

新潟県立燕中等教育学校

三年

羽賀

詩彩

「この水道水は飲めるの」と、オーストラリアから我が家にホームステイにやってきた学生に尋ねられた。

「うん、飲めるよ」と答えると、彼は目を丸くして驚いていた。そして、コップに水を汲み、おいしそうに飲み干していた。

彼は、水道水をペットボトルに入れる時も慎重だった。水をうんと細くして、ゆつくりと注いでいた。オーストラリアでは、水は貴重なもので、飲料用にはペットボトルで買ったものを飲んでいるそうだ。それだけに、水はとても大切なものだという意識が強くあったのだろう。当時の私は、蛇口をひねり、水道水を飲むということが当たり前だと思っていたし、逆に水道から自由に水が飲めない国があることを知らなかった。だから、水道水が飲めるかということを確認した彼を、不思議に感じたのだ。この驚きの経験をして以来、私は世界の水事情について関心をもつようになった。

SDGsの六番目の目標は、「安全な水とトイレを世界中に」というものだ。この目標の背景には、世界中に安全な水を使うことができなかったり、安全に管理されたトイレを使わずに生活したりしている人達が数多く存在するということを意味している。

学校でSDGsに関する学習をする中、私に最も強く訴えてきたのは、こうした発展途上国の水事情である。例えば、エチオピアでは、川で排泄をし、その川の水を使って洗濯までしているそうだ。それだけでなく、それを飲み水としても使っているのが、衛生状態は悪い。その結果、感染症を引き起こし、命を落とす子供が毎年三十万人もいるとのことだ。私の想像を超えた現実はそのれだけではなかった。子供は飲み水を確保するために、一日中水を汲みに行かなければならないのである。そのせいで、子供達は学校で学ぶこともできない。水問題は、衛生面の問題だけでなく、子供の未来をも奪うことにつながっていることにショックを受

けた。

私達は毎日、水道から無限に清潔な水が出てくると思っている。そしてそれを使って、元気に学校へ行く。このような生活が当たり前である日本は、まさに「豊かな国」である。その豊かさを享受しつつ、その水を大切に使用していきたいと、その時は思っていた。

しかし、「豊かな国」は、決して誇れるものではないということを知った。あるテレビ番組で伝えられた事実を知り、私は驚きを隠せなかった。日本は食糧の多くを輸入に頼っている。その中でも日本国内で大量に消費されている肉は、海外の莫大な水と穀物を消費して作られていることを知ったのだ。私達の豊かな生活は、輸出国で水不足や食糧不足をもたらしている。遠い国の水問題が、急に身近なものに感じられた。それどころか、大きな悪影響を与えていることに愕然とした。

「豊かな国」である以上、私は担うべき使命があると思う。インターネットで調べた時、日本のある企業がアジア、中東、アフリカなどの水不足の地域で貢献活動をしていることを知った。日本の水道技術をそれらの地域に伝え、水道や浄水場などの施設を作っているそうだ。それにより、一日何千万トンもの真水を作り出し、生活用水や飲料用水として使われている。日本の支援により、わずかだが、水に関わる環境が整ってきていると感じる。このまま続けられれば、子供達も元気に学校に行けるようになると思うととても喜ばしい。

世界の水問題の一端は、私達にも責任がある。だからこそ、国や企業、個人で、できることから取り組むべきだと考える。それが、私達に課せられた使命だと感じる。日頃から水に感謝し、日本と世界の水問題は一直線につながっているということを心に留め、水を大切に使用していきたい。

全日本中学校長会会長賞（優秀賞）

あいにく

熊本県 甲佐町立甲佐中学校 三年 豊永 はる

「明日はあいにくの空模様でしょう。」

「本日はあいにくの雨の中……。」

よく天気予報や挨拶で耳にするフレーズだ。しかし、私は「あいにく」だとは思わない。

夏の暑い日、父は自宅近くの畑まで両手にバケツを持って何度も往復していた。私も手伝ったことがあるが大変な作業であった。農家の祖父は雨が降ると、

「今日はよか雨が降った。」

と喜んでいて。雨は行事が中止になったり、外出することがおっくうになったりするが、雨を待ち、喜んでいる人もいる。私は雨が好ききだということではないが、何となく、「安心する」というのが私の正確な答えだ。

水も雨も農家にとってなくてはならない。川よりも低い場所の田畑に水を入れることは容易に想像することができ、川よりも高い場所や斜面の土地ではどうなっているのかという疑問を持ち、調べることにした。

近所の場所では「上井手用水」と呼ばれる用水路がある。大きな川にせきを作り、上井手用水へと水は流れ小さな用水路や水道橋などを通って田畑へと水を引き込んでいる。他にもため池や水車、山都町にある円形分水など様々な工夫があり、水を安定して利用するための先人たちの知恵を知ることができた。水を有効に利用することは弥生時代の稲作が始まった時から取り組んでいることがわかっていて。人々にとって安心した生活を送るために水や雨がどれだけ大事かということを知った。

しかし、雨が嫌いになる出来事が起きた。昨年の熊本豪雨だ。テレビで流れる衝撃的な映像に大きなショックを受けた。何度も訪れたことがある人吉球磨地域。あの球磨川や万江川、川辺川が恐ろしい姿に変わ

った。人吉に住む友人が心配で、無事であることがわかった時は涙がでた。父は以前、人吉に住んでいたこともあり、災害後すぐにボランティア活動に参加し、ほぼ毎週人吉に行っていた。クタクタで帰ってくる父に

「大丈夫？」

と声をかけると、

「今、行動せんといかん。」

という力強い答えが返ってきた。その後、中学校でボランティア活動の募集があり、すぐに申し込み球磨村へ行った。言葉が出なかった。その光景に「水は残酷である」と感じた。家は壊滅状態、田畑には土砂がたいて積し、色々なものが流れ着いていた。そこには祖父母や父のような田畑を大事にしてきた人がいたのだろうと思いつき、一生懸命土砂と漂流物の撤去を頑張った。一緒に参加した皆の力で何とか元の姿に近いところまで整備することができた。その時の被災者の方の涙は忘れられない。「今、行動せんといかん」父の言葉を思い出した。

時に恐ろしい水。しかし大切な水。

歴史上人々は何度も災害を経験し、そのたび毎に立ち上がってきた。これからも私たちは水とうまく付き合ひ、安心して暮らせるための工夫をしながら生活しなければならぬ。そして、私たちがとって水は最も大切であるということをお忘れず、先人たちの知恵と行動に感謝しながら日々を送っていききたい。

雨は決して「あいにく」ではない。

水の週間実行委員会会長賞（優秀賞）

「あの子達を救いたい」

愛知県

豊橋市立本郷中学校

二年

中村

光里

二〇一九年十二月に中国で見つかった新型コロナウイルスは、『大切な人』みんな大事に過ごそうと誓った『小学校生活残り一ヶ月』、人と人とのふれ合いの時間など、私達の大事なものを奪っていった。悲しみや、悔しさ、怒りを感じ、なんとなく世の中が暗くなった気がした。

第一波の緊急事態宣言が発令され、小学校と中学校をまたいだ貴重な学校生活の三カ月間を奪われ、自宅で静かに過ごす事になった。ぼんやりとテレビを眺めていると、衝撃的な光景を目の当たりにした。

私と同じ年の女の子がやせ細った体で、泣きながら、ぐったりしている赤ちゃんを抱っこしている。今も飢えや病気で多くの子供が命を落としている。水がなく何時間もかけて水を汲みに行く子供達の姿。やっと着いた水場は、茶色に濁っている。それを嬉しそうにポリタンクに汲み、また来た道を帰って行く。そんな生活を毎日送っている。当然学校にも通えていない。

近年、世界人口の約五十パーセントが水を得るのに厳しい状態にある。水資源や給水システムが整っていないために、綺麗な水が得られず、健康にも影響を及ぼしてしまうのだ。

一方私達は、蛇口をひねり、毎日何のためらいもなく綺麗な水を飲むことが出来る。あの子達がこれを見たら夢のように思うだろう。

このコロナ自粛期間中を、ただ用意された勉強をするだけではあまりにももったいないと思ったので、『日本の技術で世界を救う』というテーマで自分なりに社会科研究をすることにした。

私の家はトマトを水耕栽培している。この施設溶液栽培の技術ならどんな土地でも野菜を栽培できる。そのためには水が必要だ。ではその水をどうやって確保すれば良いのかと研究が進んでいった。

日本には海水から淡水を作り出す技術、水を安全に各家庭や施設に届ける技術、そして使用した水を安全に自然に戻す下水処理技術などがあ

り、海外でもこの技術が活躍している事を知った。

感染症などを含む病気を減らす衛生面や、農業、工業など、何においても水が必要で、その結果「水」さえ確保出来れば、あの子達を救えるだろうという考えに行き着いた。

『水の惑星』と言われる地球だが、私達の生活のために取水できる水の量は、地球に存在する水のおよそ0.0000000001パーセントしかない。しかも今後の人口増加や気候変動により、世界規模で水不足になることも予想されている。

そんな貴重な水を、日本に住む私達は不自由なく使用できる環境にある。『日本の名水百選』なんていうぜい沢なものまである程、私達は豊富な水に恵まれているのだ。

このコロナ禍で日本が世界に比べて、感染者数を爆発的に増やすこともなく済んでいるのは、日本人の元々持っている綺麗な水質によるものであると思う。衛生的な生活を送るには、「水」が欠かせない。手洗いがいい、掃除洗濯、何においても水が必要なのだ。

水を作り、引き、使用後の汚水を処理し、また海に戻す。水を安全に循環させる技術を日本は沢山持っている。

あの子達を救えるこの技術を、私達はもっと知っておくべきで、企業レベルではなく国同士の事業として支援していかなければならないと強く思う。

水を当たり前のように使用できる環境に感謝しつつ、自分達さえ良ければそれで良いとせず、『水の惑星』に住む人々が、みんなその恩恵を受けることが出来るような社会を私は作りたい。

あの子達と共に生きていく未来のために、今一度「水」について世界の国々が一緒に考え、行動していけたら良いなと思う。

独立行政法人水資源機構理事長賞（優秀賞）

「四国四県、友情の水」

香川県 香川大学教育学部附属高松中学校 三年 溝口 真央

夕方放送される地方のニュース番組でも、今年は連日コロナ関連の報道が中心だ。しかし、私の住む香川県では例年この時期には、天気予報とセットで「早明浦ダムの貯水率」のニュースが毎日伝えられていた。これ以上貯水率が下がれば、取水制限をしなければならぬと報道されるほど、ダムの水が枯渇した年もあった。ホームセンターに行けば、渴水対策として、蛇口につける節水グッズや雨水の利用商品が陳列されており、市役所の入口には「節水にご協力ください」という横断幕まであった。香川県の水不足は、ここ数年で急におきはじめたものではなく、香川県民の水との戦いははるか昔から続いている。

日本で一番面積が小さい香川県は、ため池が一万二千以上あり日本でも三番目に多い。温暖な瀬戸内海気候は年間の降水量がとも少なく、地理的にも大きな河川がないため、慢性的な水不足にみまわれてきた。この深刻な水不足をどうにか解消しようと、昔の人は県内各地にため池を築き水の確保に力を注いできた。それでも、水不足に陥ったときは、頼みをするしかなかった。讃岐の国司を務めていた菅原道真公が、民の苦しむ姿をみて、自ら身を捧げて祈願したところ、待望の雨が三日三晩降り続いたというのは有名な話である。慈雨に喜ぶ民は、その歓喜と道真公への感謝を踊りで示した。その雨乞いの念仏踊りが今もなお、五穀豊穰を祈願するものとして、地元の滝宮天満宮で受け継がれている。

もちろん、雨乞いだけに頼ってきたわけではない。土木の技術を集結して、雨が多く降る他県から水をひいてくる香川用水を建設した。田植えの時期になると、ごうごうと音をたてて流れる水を怖いとさえ思うことがある。その水は、はるかかなた高知県の早明浦ダムから流れ出て、吉野川を下り、讃岐山脈を貫くトンネルを通り、はるばる香川まで運ばれてきている。そして、私たちの生活に欠かせない、水道用水・工業用水・農業用水として日々使われている。香川用水についていろいろと調

べると「讃岐の大動脈」と言われる理由に気づかされた。

祖父が行う米作りでは、五月から九月にかけて集中的に多くの水を使用している。五月の連休前には、田植えの準備のために代かきを行うが、その際は田んぼ一面になみなみと水が張られる。香川用水から分かれた水路に水を引き込み、田んぼとの境に祖父が手作りしたせき板を差し込むと、水は勢いよく田んぼの中へと流れていく。まだ小さかった頃、祖父について田んぼに行き、せき止められた水路に裸足で入り、膝下まで流れる冷たい水を弟とかけあつて遊んだことを鮮明に覚えている。祖父の田んぼに水がたまると、弟と二人で協力してその栓を外し、お隣さんの田んぼに水が流れていくようにしていた。上流の田んぼからだんだんと下流の田んぼへ、効率よく水をまわしていくことで、水を無駄にしない工夫がされていた。すぐに田んぼに水を引ける有難さ、偉人の技術のすばらしさ、そしてなにより水の大切さを実感した。

私たちがあたりまえに食べている米や野菜の成長には水が必要不可欠である。水がなければ食卓まで届くことはない。蛇口をひねれば水はいつでも・いくらでも出てくるので、私たちは水を使い放題のように錯覚しているが、水は枯渇する可能性がある。水も「限りある大切な資源」であることを意識して生活したい。なにより、香川用水に流れる水は、周りの県から分けていただいた「友情の水」である。一滴も無駄にすることなく大切に活用していかなくてはならないと感じた。食卓に差し込んでくる夕日を見て祖母が「明日も晴れやなあ」と言う。祖父は少し残念そうに「空梅雨やな」と言う。そんな日常を見て、今年はコロナの影響で手伝えなかつた田植えを来年は手伝おうかなと思った。

中央審査会特別賞（優秀賞）

潤う未来

鹿児島県 喜界町立喜界中学校 三年 喜禎 あさひ

周囲約四十八キロ、面積約五十七平方キロメートル、奄美大島の東方約二十五キロの位置に浮かぶ小さな島、喜界島。この、私の住む島には、地面の下に巨大なプールがある。プールと言っても、普通に想像するあのプールではない。大規模なものとしては、沖繩の宮古島に続いて国内二例目となる「地下ダム」と呼ばれるものだ。地下ダム。地下にダム。この耳慣れない言葉から、それがどういうものなのか、何のために存在しているのか、想像できるだろうか。

ある夏の日、綺麗に区画整理された畑が続く緑の大地には、熱い太陽が容赦なく照り付けていた。気付けば、ここ数日雨が一ミリも降っていない。そんな中、農道を車で走っていると、左右から勢いよくシャワーの水を浴びた。「気持ちいい」直接浴びたわけではないが、畑と畑の間に立つ幾つものスプリンクラーから噴射された水は、風に乗って高く舞い上がり、サトウキビたちは気持ちよさそうにきらきらと輝いて見えた。そう、これが、「地下ダム」から送られる農業用水なのだ。喜界島には、生活用水とは別に、島内に張りめぐらされたもう一つのパイプラインがある。私達の暮らしを守るもう一つの「命の水」だ。

喜界島は、現在でも、年間約二ミリずつ隆起している世界的にも珍しい隆起珊瑚礁の島だ。その土地の地層には特徴があり、下層に不透水層の基盤、そして、その上層を石灰岩が覆っている。石灰岩は、多孔質で透水性が良かったため、降水は速やかに地下に浸透し、海に流れ出ていく。そのため、喜界島には河川がない。その上、梅雨と台風の時期に集中して雨が降るといふ気候の特徴もあり、年間約二千ミリ以上の降水量があるにもかかわらず、島の農業は、度々水不足に悩まされてきた。

そう、そこで、地下を通して海に流れ出る水を、地下に止水壁を造ることによって、石灰岩層に貯えておくという仕組みが、この「地下ダム」というわけだ。

「そろそろ、第二地下ダムの建設が始まるよ。これからは、更に、島の農業は発展するよ。」父が嬉しそうにそう話した。私の家は黒糖焼酎の造り酒屋だが、その原料になるサトウキビの栽培も行っている。しかも、有機栽培だ。そんなこともあり、私も小さい頃から農業について多少の興味を持っていた。「雨待ち農業」地下ダムがなかった頃の苦労や収量の不安定な状態を、島の人はよくそう言っていたが、今は、日照りが続いても、トラックで大量の水を運んで畑に撒く必要がなくなり、仕事はだいぶ楽になった。そして、計画的に、更に挑戦する農業へと繋がっている。

私の父はよくこんな話をする。「豊かになった大事な水資源を活かしていくために、もつと環境にも目を向けていかなくてはいけない。」水は、生物が生きるために何より大事なものだ。私は、最近思うことがある。地域の奉仕作業に参加した時の街の中や海岸、畑の畦道などのゴミの量がとても気になるのだ。空き缶、ペットボトル、お菓子の袋、そしてタバコの吸い殻など、土地を汚しているそれらは、地下ダムの水に何らかの影響を与えてはいないのだろうか。理科や社会科の授業で学んできたように、世の中は循環している。健康な心と体を維持するためには、安全な食べ物が必要で、その食べ物は、安全な土地から作られ、それには安全な水が必要になる。せつかく、地下ダムによって良い環境が整うのだから、私達はそれを十分に活かしていくような行動をしなくてはならないと思う。

さあ、いよいよ「第二地下ダム」の建設が始まる。私は、中学生の立場から、持続可能な島、社会を作るために、今、自分にできることを考えていきたい。この喜界島が、永遠に豊かな水に溢れ、動植物も、私達人間の生活も命も、すべてが潤い続ける未来のために。

入選

畏怖すべき大切なもの

岩手県 岩手県立一関第一高等学校附属中学校 二年 畠山 史子

津波は一瞬にしてありとあらゆるものを飲み込みました。東日本大震災の時、私は内陸の安全なところにいました。しかし、私の祖父母は大船渡に住んでいて、祖父は陸前高田市内の病院に勤務していて被災しました。当時私は三歳で、震災のことはあまり覚えていません。家族に聞いたら、祖父母と連絡がつかず、とても心配したそうです。そこで父が大船渡へ祖父母を探しに行きました。母は断水と停電で復旧のめどが立たない状況の中でとても苦労しました。備蓄品を使って家族と避難してきた従兄弟たちみんなにご飯を食べさせたり、トイレを清潔に使ったりするために水が貴重だったと言っていました。

祖父の勤めていた病院はたくさんの被災者が押し寄せ、残っていた食料や水はすぐに底を突きそうでした。大きな貯水槽があったのですが、患者と病院スタッフと避難してきた人の数を数えて、料理はしない、洗濯はしない、お風呂を沸かさないと決めても一日分しか保たないということが分かりました。祖父は、病院の事務長をしていたので、食料よりも水の確保に奔走したそうです。

その後、緊急SOSを受けて、震災二日目から愛知県や静岡県から大きなトラックで水がどんどん運ばれました。どれほどかありがたかったことでしょう。それでも、送られてくる水をすべて、四百トン入る貯水槽に入れても、一日に二回入れないと足りません。震災当時、国内外からたくさんの支援が届いたことを決して忘れないと、今も祖父は言っています。祖父の話を幼いころから聞いていた私は災害時に水が貴重だということをいつも心にとめるようになりました。

去年の夏休みに、赤十字の学習会に参加し急急手当や防災食のことを学びました。私たちの体は半分以上が水で出来ていて、水分が不足すると脱水症状が起こり、様々な問題が発生します。手洗いや歯磨き、洗髪など清潔にしなければ、感染症などの新たな問題も起こります。また、

普段お米を研いで、水と一緒に炊飯器で炊きますが、災害時には炊飯器が使えないと考えられます。非常食のアルファ米は仮にお湯が用意できれば十五分、お湯が手に入らないときは水を入れて六十分かかることが分かりました。この体験でもやはり水が必要だということが分かりました。

私の備蓄品リュックサックの中に五百ミリペットボトルを二本入れています。これは最低限の水分補給用で、一日でなくなってしまう量です。生活用水も含めると一日に一人三リットルは必要です。我が家にある水を家族全員で協力しても、よくて三日、悪いときには一日でなくなってしまう。このことから、震災時、水は一滴でも無駄には出来ないとということが分かりました。

今、私の家では、災害に備えた食料や飲料の備蓄方法の一つであるローリングストック法を心がけています。製造日の古いものから食べたり飲んだりして、使った分を新しく購入することで、常に一定量の備えがある状態にしています。この方法は、備蓄を始めやすく、普段の生活をしながら備蓄でき、賞味期限を切らさないことによつて災害発生時でも安心して水分をとることが出来ます。水は誰にとつても欠かすことのない大切なものです。それは普段の生活でも、災害時でも変わりません。災害はいつ起こるか分かりません。万が一に備え、普段の生活からできることを心がけていきたいと思えます。

震災の時、水は私たちに波となつて襲いかかってきました。しかし、復興が始まると、水はとも必要になりました。東日本大震災から十年経ちましたが、「水は私たちを脅かす脅威にもなりますが、なくてはならないものもある。」ということを学びました。

水は、畏怖すべき大切なものなのです。

入選

水への恩返し

福島県 会津若松市立一箕中学校 二年 塚田 暖菜

私達人間の身体の六割は水で構成されており、産まれた時から水と共に生き、成長し、命が燃えつきる最期の瞬間まで身体の中で寄り添って生きてくれます。日々身体の中で、温かく見守り包み込んでくれる水に、私達は何を返せるでしょうか。マイクロプラスチックによる水の汚染、東日本大震災による汚染水、生活排水での水質汚染等、私達は水を大切にすることを返すか、汚して恩を仇で返していることが多いのではないのでしょうか。

水を必要としている生き物の中で、水を汚し、他の生き物にまで犠牲を強いるのは、私達人間だけです。今から六年前、道端を歩いていると、用水路からフワツと風に乗った汚臭が鼻に届きました。ブクブクと泡立ちながら、用水路に生活排水が流れ込んでいたのです。泡の下で赤い何かが蠢いていました。目を凝らして見ると、ザリガニでした。小さな子供ザリガニも、卵を抱えた母親ザリガニの上にも容赦なく生活排水が降り注いでいたのです。こんなにも汚染された場所にも生き物が一杯生きていることに驚き、悲しくなりました。あれから六年後、ザリガニは一匹もいなくなっていました。残っていたのは、六年前と何も変わらない泡立った生活排水と、鼻につく汚臭だけでした。

目を閉じて想像してみてください。もし自分があの川に住むザリガニだったら。もし私達に降り注ぐ雨が生活排水のように臭く有害だったら。生き物達はただ一生懸命生きていただけなのに、何故私達人間のせいで、罪無き生き物達が犠牲にならなくてはいけないのでしょうか。水は私達人間だけの物ではありません。植物も他の生き物にも無くてはならない、とても大切な地球からの恵みなのです。水は私達人間に対して、どう思っているのでしょうか。人間が生きていくためには必要不可欠な存在なのに、感謝されず、一方的に汚され、水不足になったら文句を言われ、洪水や津波の時には恐れられます。水にも感情があったなら、人間に對

し怒っているのでしょうか。それとも、もっと大切にしようと嘆き悲しんでいるのでしょうか。あなたの目の前の水は、無言で何を私達に訴えてきているのでしょうか。

震災や断水の度に、水の大切さが身に染みます。コロナ禍の今、手洗いがいで感染対策できるのも水のおかげです。しかし、日々の忙しい生活の中で、水を大切にする気持ちは時間と共に頭の片隅に追いやられていきます。どうしたら水の大切さを忘れずに心に刻めるのでしょうか。

私は、たった小さな一歩でも出来る事から続けようと思い、節水シールを作って水場の近くに貼り、毎日意識づけることにしました。トイレのレバー近くには「小で流すこと」、洗面場や台所には、「大切な水」というように、手書きの水のイラストと共に一言添えてシールを作って貼りました。その結果、シールが家族の目にも入ることになり、水道代が下がり、家族皆が水を大切にすることが続くようになりました。少しは水に恩返しできた気がして嬉しかったです。今日の水は、特別に美味しく感じられました。

いつも当たり前前に家族のように側にいてくれる水。蛇口を捻ればすぐに会える水。毎日、飲み水、風呂、トイレ、洗濯、料理等、無くては生きていけない水。世界中で水道水が飲める国はわずか十五ヶ国しかありません。現在の日本が、世界に誇れる水準の綺麗な水に会えるのは、過去の方々の努力の結晶だと思います。私達は未来へ、この美しい水を繋げることが出来るのでしょうか。それとも、負の遺産として未来の私達の子供達に背負わせるのでしょうか。積水成淵、水を大切にする一人一人のわずかな行動でも、積み重ねれば、大きな力になると思います。何気ない日常を支えてくれる水に、感謝の気持ちを持ち、少しずつでも恩返しすることが私の目標です。

入選

カレーの中の危機

茨城県

土浦日本大学中等教育学校

三年

網永 莉々

私は驚いた。

カレーライス一杯に一〇九五リットルもの水が使われていたのだ。この水の量は浴槽五杯半に匹敵する。私はこの沢山の水を一度に飲むことを想像した。水が喉につまんで、溺れたような息苦しさを感じた。

この数字はバーチャルウォーターという考え方で試算された値だ。バーチャルウォーターとは、食料を輸入した時に、その食物生産に必要なとされる水の量である。食料自給率が三十八パーセントと低い日本において、輸入は食料の十分な確保に必要不可欠であり、それと比例してバーチャルウォーター量は莫大となる。過去には日本の輸入食物全てに必要な水は八〇〇億立方メートルという途方もない数字が算出されている。

例えば一キログラムのトウモロコシを生産するには、一八〇〇リットルの水が必要となる。牛はこうした穀物を大量に消費しながら育つため、牛肉一キログラムを生産するには、その約二万倍もの水が必要となるのだ。

バーチャルウォーターの輸入量が多いことには問題がある。それは輸出国の水を過剰に利用し、その国の水問題を悪化させてしまうということだ。例えば、中東オマーンでは、砂漠に囲まれた農場で、日本向けのインゲンを栽培している。年間降水量一〇〇ミリで河川のないオマーンは、水の確保に日々奮闘している。貴重な水は日本へ輸出する食料の為に使われる。遠い国の問題だと思っていた水不足は、実は私達自身の問題だった。

カレーの皿の中で、複雑に国際問題が渦巻いていることに、私は危機感を覚えた。食材の輸出国は豊かな国ばかりではないだろう。私たちが輸入した食品が、彼らの利用できる水を減らし、時には命を奪ってしまう。先進国が世界の水資源を独占してしまう今の世界の経済システムは不平等だ。

SDGsは目標の一つに「人や国の不平等をなくそう」と掲げている。豊かな国が開発途上国を追い詰めているようにも見える現状に、私の心は痛みを感じた。私が一口飲むコーヒーが、何も考えずに食べたチョコレートが、誰かを犠牲にしているのだ。

今を変える為に、何をすればいいだろうか。

日本では年間二五三二万トンものフードロスが生まれている。大量のフードロスは輸出国の大量の水資源を捨てていることと同じだ。昨今その無駄をなくす為にコンビニでの廃棄削減への努力は共感できる。家庭でのフードロス削減に私がすぐできることとして、地産地消が考えられる。食べ物も飲み水も自分の住む地域で調達することが、地球環境への配慮、そしてバーチャルウォーターの削減にも繋がるのだ。

私は今日、ビオトープの水田で田植えを行ってきた。泥だらけで足腰も痛くなったが、青空の下で大勢の力で整然と植えられた苗を見て誇らしくなった。ここで育った米は、近隣の小学校の給食や餅つき大会で提供される。自らが作った米を食べ、「おいしいね」と皆で笑いあう幸せを私は体験した。誰も苦しむことのない食べ物。地域の皆で作った米が、私に地産地消の意義を示してくれる。稲作は収穫まで多くの水が必要とする。だが、使った水は循環し、利用できる水へと戻ってくる。地産地消は環境負担も少なく、外国の水資源を奪うこともない。私は田作りで世界のためにできる事の一つを身をもって体験した。

日本ではバーチャルウォーターの増加に歯止めがかからない。輸入を完全に断つことは難しいだろう。でも、私達一人一人がテーブルの上で起きている、遠い国の出来事に目を向けることで、世界の水問題の改善に一歩ずつだが、しかし着実に近づくことができる。

人や国の不平等がない世界。私は人々の幸せでできたカレーを作る。

入選

水と共に生きる幸せな未来のために

茨城県 筑西市立下館中学校 二年 藤代 かりす

「生きるためには、どんなに汚い水でも飲まなくてはいけない。」この言葉は、私にとって大変衝撃的だった。

水が自由に使え、水のある生活が当たり前だと思っていた私はちょうど一年前、このテレビCMをきっかけに、同じ地球上でも水の環境に格差があることを知り、世界の水事情を自分なりに調べた。発展途上国を中心に水不足や水源の汚染、二十億人以上の人が安全な水を手に入れることができない。不衛生な水で命を落とす。水汲みのために学校へ行くことができないなど、たくさん問題があることが分かり、水を大切に使用しなければいけないと痛感した。そして、自分にできることを考え、節水や汚れたものを直接流さないなどを意識して生活するようにしてみた。でも、やはりそれほど危機感を持っていないためか、ついつい出しっぱなしや使い過ぎてしまっていた部分があった。

今、世界ではSDGsの取り組みが行われている。私達の学校でも昨年、総合の授業でSDGsについて学んだ。SDGsという言葉は、テレビなどを通して知っていたけれど、詳しい取り組みは知らなかったのだ、とても有意義なものであった。17の目標の中で興味をもった分野でグループを作り、最終的にパビリオン形式で発表を行った。私は、今までの経緯から水に関心があったので、「目標6安全な水とトイレを世界中に」を選択した。

水不足や劣悪な水質、衛生施設の不備は医療や教育などに悪影響を与える。命に関わる大きな課題を抱えているのだ。そこで、すべての人々に飲料水、トイレ、衛生設備などを提供することを目標としている。これらの取り組みは、私が衝撃を受けた発展途上国の水問題解決につながっていくものであると思う。

現時点で、劣悪な水質衛生環境下で暮らす人々の多さには改めて驚かされた。特に、トイレがなく、道端や草むらで用を足す人は約七億人も

いるのだ。今の日本では到底考えられないことである。この学習会をしていく中で、様々な問題及び水との関わりを考えさせられた。

「水の惑星」といわれている地球。豊富な水と自然豊かな地球も今、危機に迫られている。地球温暖化に伴う気温の上昇などで異常気象が起こり、台風や豪雨、記録的な猛暑が増えたり、水不足など、深刻な影響を与えている。生きていくうえで欠かせない水も、場合によっては私たちに脅威をもたらしてくる。

日常使う水は、川から取り入れられ、浄水場できれいにされて私達のもとに届く。水は雨や海水などが形を変えて自然の中を循環しているため、森や土の環境が悪くなるときれいな水がなくなるといえない。きれいな水をつくるためには自然環境全体を守らなければならない。今問題視されているプラスチックによる海の汚染もその一つであると思う。

一定のサイクルで地球上をめぐる水。私達の生活が豊かになつた分、使用できる量も質も下がってきてしまっている。限られた水を、私達が大切に使う必要があるので。

SDGs、17の目標はそれぞれが一つの方向から考えるのではなく、すべてのつながりを考えながら取り組むことによって達成するものだと思う。

この学習会は、世界の現状を知る最初のステップではあるが、改めて水の大切さや、必要性を知ることができた。ここで知って終わりにするのではなく、次は「考動。」私たちに何ができるかを改めて考えて行動し、美しい地球を守っていきたい。安全な水で、すべての人が幸せになる未来を目指して。

入選

八ッ場ダムと人々の暮らし

群馬県 群馬大学共同教育学部附属中学校 三年 豊田 楓芽

綺麗な林に趣深い川原湯温泉の宿。しかし、そこを抜けたところには「立ち入り禁止」の文字。これは数年前に長野原町へ祖父とお墓参りに行った時に見かけた。私の祖父は、子供の頃、長野原町に住んでいた。年に一回程度お墓参りに訪れることがあった。しかし、今では、ダムの底に沈んでいる。八ッ場ダムの底にあるのだ。僕が訪れるようになった頃には工事が始まるうとしていた。

今では、ダムの放水を観光資源にしている所がある。黒部ダムはその一つで、毎秒十トンを超える水が放水されるのを見にくる観光客が増加している。しかし、そんな中でも険しい山脈で百七十一人が亡くなったと言われている。そのことについてテレビで触れられることもあった。

八ッ場ダムでは、一人が事故によって亡くなっているが、黒部ダムではなかった住宅の水没の問題も起こった。計画は約七十年前からあり、祖父が子供だった頃から、すでに計画があった。祖父は「その頃はよくわからなかった。」と言っていた。また、インターネットには「買い取られたお金よりもその土地に対する愛着の方が大きい」という投稿がありダムの建設に批判的な意見が多かった。

反対する運動も起こり、村は二つに割れたということを知った。その原因となったのは歴史をもつ川原湯温泉だ。祖父の家も宿を経営していた。質素で落ち着いた雰囲気は今でも覚えている。地元への愛着も強かっただろう。代々繋いできた旅館を手放すという悲しさと新しい場所やっけていく不安で悩まされただろう。想像するだけで心が痛んだ。それと同時に、温泉という水の恵みで生活してきたのが、ダムという水のための施設に沈んでしまうという水に裏切られたような複雑さが心の中に膨らんだ。

ダムの建設中の場所に訪れることがあった僕と姉は小さなプレハブの中に設置されていた観光用の施設で遊んでいたが、祖父は一人工事の現

場がよく見える場所に立って眺めていた。いつもはよくしゃべる祖父だが、その時は口数が少ない気がした。ふるさとに対する悲しい気持ちがよくみえたのかもしれない。

令和二年三月三十一日、八ッ場ダムが完成した。祖父を含め村の人々は完成したことについてどう思ったのだろうか。「どうして自分だけ被害を受けることになったのか」「他の土地でも良かったのではないか」と思う人もいたのではないか。もしも僕が長野原町出身だったらどう思ったのだろうか。

しかし、八ッ場ダムが僕たちの生活を支えてくれたことは言うまでもない。台風の際は、川の氾濫を防いでくれた。発電の面では僕たちの生活になくてはならない電気を発電してくれている。今も何気なく使っているこの水だって、ダムからきている水なのかもしれない。八ッ場ダムの下流に住む僕たちにとっては、無くてはならないダムだったのかもしれない。

何年経ってもどうしても地元の人たちは納得できないかもしれない。この問題はどれが正解だったか決められるものではないと思うし、決めるものでもないと思う。地元の人が一番喜ぶのは、僕たちが大切に水を使い、八ッ場ダムとそれに関わる人たちに感謝することだと思う。限りある水をこれからも大切に使っていきたいと思う。

入選

きれいな水を守るために

群馬県 渋川市立渋川中学校 二年 高橋 みおと

「まるで水を得た魚だね。」

テストの結果にしょんぼりしていた弟は、大好きなミニ四駆の話になると途端に元気になった。その時母が言ったこの言葉に、私は笑ってしまった。「水」の付く言葉は、他にもたくさんある。パッと思い浮かぶのは「山紫水明」や「我田引水」「水に流す」など。そこで私は気付いた。これらの言葉に例えとして使われている「水」は「きれいな水」である事に。もし「きれいな水」が毎日の生活の中で身近になかったら、これらの言葉は生まれなかったのかも知れない。

日本では当たり前のように水道水を飲んでる。私達が「きれいな水」を身近に感じられるのは、上水道の設備が整っているおかげだ。しかし、日本のように、水道水を直接飲める国は、世界に十五カ国程しかない。そして世界の約三分の人が、十分に安全な飲料水を手に入れることができない。その中には、汚れた地表水をそのまま飲むしかない人もいる。もし、清潔ではない「汚れた水」しか身近にない国の人が「水を得た魚」や「我田引水」という言葉を聞いたら、大きく意味が違ってくるだろう。汚れた水を得た魚は弱ってしまうだろうし、汚水を自分の水田に引いても、何の利益にもならない。

私達は一日にどれだけの「きれいな水」を使っているのだろうか。日本人一人当たりの生活用水消費量は世界二位で、一日に約二〇〇〜三〇〇リットル使っている。これは世界平均の約二倍だ。用途の割合を見ると、風呂が約四割を占めている。確かに日本の風呂は浴槽に水を溜める仕様だが、工夫次第で節水はできる。例えばシャワーはなるべく控えて湯船に溜めたお湯を使うようにする。シャワーは一分間で、約八〜十二リットルの水が使われるそうだ。またお湯が冷める前に、家族が時間をあけずに続けて入る。これらは我が家でも、家族全員で実行している。

「水に流す」という言葉もよく使う。この言葉の由来は「みそぎ」と

いう、水がけがれを洗い流すという考え方が転じて、過去のいざこざなどを無かった事にするという意味だ。「きれいさっぱり水に流して仲直り」などと使うが、流された水はどうなるのか。そこで私は、小学四年のときに見学に行った浄水場を思い出した。ここでは、川から取り入れた水を浄化・消毒し、安心して飲める水にしている。勤務している人は、休日も夜も二十四時間交代で、水質や水量を管理しているのだ。私はこのとき、水をきれいにするために多くの過程と労力が費やされている事を知り、驚いた。同時に、汚水は川に流れて終わりではなく、川、浄水場、家庭と循環していると気付いた。水の汚れは「水に流す」ことはできない。無かったことにはできないのだから、私達は毎日の生活の中で汚水を減らす工夫をするべきだ。シャンプーや石けん、洗剤は使い過ぎずに適量を守る、食べ残しを減らす、食器は油污れを拭き取ってから洗うなど。これらは難しいことではないと思う。

日本は雨水を資源にしている。年間降水量は世界平均の約二倍だが、降った雨の大部分はすぐに海に流れてしまったり、蒸発してしまったりするそうだ。ダムに貯めて浄水場で処理できるのは、降水量のわずか二割だという。更に地球温暖化で降雪量も減り、春の雪解け水も減ってきている。日本は決して水が豊富な国ではないのだ。

生きていく上で必要不可欠な水。その限りある大切な水を守るために、私はこれからも水について関心を持ち、節水を心がけていきたい。そして「きれいな水」が使える暮らしに感謝し、後世にも「山紫水明」の地を残せるよう、汚水を減らす努力を続けていきたいと強く思う。そうすれば「水」の付く言葉の意味も、今後変わらずに済むだろう。

入選

モツカ池が教えてくれたこと

群馬県 渋川市立渋川中学校 二年 天田 ヒカル

近所にあるスーパーの裏側に、モツカ池と呼ばれ、地元住民から親しまれている、直径5m、深さはひざ下ほどの小さい池がある。

池には一年中、きれいな水が湧き出し、小さな生き物たちが暮らす大切な場となっている。「池」とはいうものの正確には「泉」で、水底から砂をモツカモツカと吹き上げていたことから、その名がついたそうだ。

このモツカ池は誰がいつ作ったのかは不明だ。十四世紀半ばに完成した「神道集」という書物の中に、モツカ池の伝説についての項があつて、昔から存在し続けているようだ。モツカ池は、飲み水としてはもちろん、洗濯や炊事などに利用されていて、古くから地域の人々の暮らしに役立っていた。

また、池のすぐそばには鉱泉が湧いていて、モツカ池の様子から「モツカの湯」と名付けられた。群馬県だけでなく全国的に知られた名湯・伊香保温泉よりも歴史が古いとも言われる。江戸時代後期からは、温泉旅館も営まれていた。

今では、その温泉旅館は無くなってしまったが、地元の人たちが協力しあつてモツカ池を管理している。私の祖父も、その保全のボランティア活動をしていた。時々、私もその手伝いをしていく。

私にとってモツカ池というのは、小さい時からずっとある身近な水辺で、池に住む色々な生き物たちと、触れ合うことができる場所だ。しかし、それだけでは無い。モツカ池は、自然界の食物連鎖を、この目で確かめ学べる「命の教室」でもある。

水辺には、小さな虫が集まってくる。その虫を、池に住む魚が食べ、その魚を鳥や他の動物が食べる。池ができてから、その営みはずっと続いているのだらう。私は、それを小さい時から見てきた。実際に見てきたからこそ、命のつながりや大切さを実感できているような気がする。

また、水道が普及したことで、モツカ池の水は住民の生活に使われな

くなって、生活用水としての役割は無くなってしまったけれど、水辺というのは、地域の人々との交流の手助けを行っていただいているのではないかと私は思う。

祖父の手伝いをして、池の掃除や魚の餌やりをしている時、通りすがりの方とあいさつを交わしたり、普段はなかなか関われない近所の方が声をかけてくれて短い間だが話すことができ、とても楽しい。親子連れが遊びに来たり、池にお参りしているおばあちゃんを見かけることもある。

水辺は、生活用水として重宝されてきたその時代から、人が集まり、つながりを持たせてくれるものであった。そして現在も水辺は、人と人とを、人と他の生き物たちをつなげる役割を担ってくれる架け橋なのだ。

今、日本ではこういった水辺がだんだん失われつつあると感じる。実際、祖父が小さな頃には、こうした水辺が、地域のそこかしこに存在していたのだそうだが、今は数えるほどしかない。

身の回りにはある水辺だけではない。世界を見渡すと、海や湖、川などの環境が崩れ、汚され、さまざまな問題も起こりつつある。

水は、人間だけを生かしているものではない。他の生き物にとっても、命を繋ぐために欠かせないものだ。多くの場合、環境を壊すのは人間であり、その環境を元に戻すのは簡単ではない。モツカ池は小さな池だけれど、地域の人々が、手間と時間をかけてその姿を守っている。おそらく、誰も何もしないで放っておいたら、池はあつという間に荒れ果ててしまうだろう。

モツカ池という「命の教室」を未来に残せるように、私自身で考え、周りと協力し、少しでも助けになる事をしていきたいと思います。

入選

小さな一歩

群馬県 群馬大学共同教育学部附属中学校 二年 矢内 沙弥

今から三年前、私の家のキッチンのシンクの水が流れなくなっていました。困った母は建築業者さんに相談することにした。

シンクの様子を見た業者さんは母に

「マンホール掃除はしたことがありますか。」

と聞いた。母は家の裏にあるマンホールの蓋を開けたことはなかった。

「これがキッチンの水が流れてくるマンホールなんですよ。」

と業者さんは「下水」と書かれた直径三十センチ程の蓋を開けた。中を皆で覗き込むとそこには驚くべき光景が広がっていた。水が溜まった表面が白く固まった油で覆いつくされていたのだ。側面のパイプからは今まさに白いドロツとした油を含んだ水が流れ込んでいた。

「えっ。こんなに汚れていたのっ。」

母は声を上げ、しばらく動きを止めたままマンホールの中を更に凝視した。側面にはL字型の太いパイプもついている。業者さんは

「パイプをL字型にすることで逆流を防いでいるのですよ。でもパイプが汚れて覆われてしまうと流れが悪くなり、排水溝があふれてしまうのです。」

と教えてくれた。驚く母を横目に、業者さんは車からビニール手袋、ザル、ゴミ袋を持ってきて

「これはザルでかき出して水気を切ってから捨てましょう。前橋市は燃えるゴミとして捨てられるのですよ。」

と慣れた手つきで凝固物をかき出し始めた。

「私もやりませう。」

と母も手袋をはめ、ひざをついてかき出し始めた。ゴミ袋に溜まっていく凝固物の山。

「これでは流れが悪くなる訳ですよ。でもいつもお皿についた油分はふき取ってから洗っていたのに。」

と母が言うと、

「なるべく油分を流さないようにしても少しずつ溜まってしまうものなんですよ。早い場合は一年でこうなってしまうですよ。」

と業者さんは教えてくれた。作業を続けていくうちに段々と水面が透明になり、底部まで見えるようになった。

「ちよつと流してみませうね。」

と業者さんがシンクの水を流すとサラサラと水は流れ、マンホールの中に透明な水が流れ込んで来た。

あとで調べてみると、この凝固物を貯めておくマンホールの内部は「トラップ枡」と言うそうだ。キッチンから出た排水や油は直接下水道に流れる訳ではなく、一度トラップ枡を通りゴミや油と水が簡易的に分類される。

この出来事で私は下水の仕組みを知ることができた。気をつけていても汚れがたまってしまうことに心底驚いた。前橋市のホームペーヂを見てみると、トラップ枡の清掃方法が丁寧に写真つきで記載されていた。一軒一軒の家庭がこの仕組みを知り、まずは自分の家の排水をきれいにする意識を持つことが大切だと思った。家庭からの排水が下水処理場を通り、少しでもきれいな水を河川や海へと戻す試みが身近で行われていることを知った。今までは漠然としていた「水」への意識が私の中で高まっていくのを感じた。

限りある資源である水。人間の命の源の水。日々きれいな水を飲めることに感謝して、流して終わりではなくどのように流すのか、少しでも水を大切にするにはどうしたら良いのか考えるようになった。

あれから三年、この春休みに今度は母と二人でトラップ枡の清掃を行った。私の顔が映るほどきれいになった水面を見て、小さな一歩を踏み出した喜びが私の中にあふれた。

入選

わたしの流れ旅

千葉県

千葉市立幕張中学校 二年

佐藤 夏帆

わたしは実にはいろいろな所を旅している。それは、空だったり、海や川だったり、空気中だったり本当にいろいろ。地面とほぼ垂直な滝を一瞬でかけ下りたことだつてある。

海にいたとき。太陽が底意地を發揮し、にらみつけてくるような暑い日だった。突然、ふわぁん。体がどんどん浮く感覚におそわれると、他の仲間と一緒に雲の一部になつていた。わたしは、一滴の水だけでなく、水蒸気として空気中や雲に存在することもできる。空から地上の景観を眺めた。とつてもきれいな。しかし、それも大きな山々へとぶつかり終わる。水の粒として急降下。まっさかさまに落ちて、地上に戻つてきた。

川にいたとき。油が浮いている場所や、ペットボトルなど、たくさんゴミが捨てられている場所を目の当たりにしてきた。うまくよけるので精一杯。少し先を泳いでいたカメが、えさだと間違えて食べてしまったのか、ビニール袋を口から出そうとあえんでいる場面を見たこともある。ふつふつと怒りがこみ上がってきた。なんで、平気にゴミを川に捨てられるのだろう。川だけに限らず、海、地上にいる他の生き物たちのことも、なんで考えないのだろう。なんで、みんな落ちていくゴミを見て見ぬふりできるのだろう。次々と浮かんできた疑問は分からないことばかりだった。

一度だけ、水道水になつたことがある。上流から取水場に入ってしまったため。そのまま浄水場へ行き、二百項目くらいの過程を経て、やっと水が送り出される配水管までやってきた。蛇口がひねられたらわたしの出番。どきどき、わくわく、明るい視界が開けると、すぐに下水道の方へ。一瞬で分からなくなつたけれど、男の子が石けんで手を洗つていた。しかし、水が出しっぱなしだった。それだけのことで、らしい。長い間、ぐるぐる回つていたり、薬品とかき混ぜられたりしたけれど、ひとりの意識のあまさが、水一滴一滴を無駄にしてしまう。そう考えると、モヤ

モヤしたもので気持ちがいっぱいだった。でも、今は浄水場でもなければ雲、川、海でもない。まっくらなところ。どこだろう。流れていく感覚だけが分かる。ずっとずっと流れていく。ずっとずっと……。

少しだけ光の当たっている場所がある。このまっくらな場所は、地面の下なのかもしれない。バケツみたいなものが、光の当たる場所に落ちてきて、わたしたちを持ち上げた。どんどん上に上がっていく。今までがまっくらだった分、とてもまぶしい。一番上まで上がってきたらしい。今度は、透明なガラスの中に入っていく。水の入ったグラスを持つているのは三つ編みをした少女だった。辺りを見渡してみると、草や木が、黄色っぽい砂に植えられている、田舎のような場所だった。とても暑い。太陽がじりじり地上を照らす。力持ちの男の人たちが十数人、他のむらの人たちも少し集まっていた。少女は、ガラスの中をうっとりとした表情で見つめている。息を大きく吸つたのが分かった。

「今回は、私たちのために井戸を作ってください。本当にありがとうございます。……。本当にありがとうございます。私たちは、近くに川や湖がなく、そこから生活に必要な水を得てきました。しかし、そこに生活排水やし尿を流してしまい、当然、水が汚れていきました。その水を飲んだ子供達が病気で苦しんだり、亡くなつたりしているのを見て、やるせない気持ちでいっぱいでした。帰り道、流した涙、一滴一滴がこの透き通るようなガラスの中の一滴一滴なのかもしれません。本当にありがとうございます。……。」

目に涙をうるませ、ガラスの中の水をぐくくと飲んだ。少しも無駄にせず。明日は、きれいな水がもつと多く行き渡りますように。

入選

私の使命

東京都 都立富士高等学校附属中学校 一年 福田 万結

『我田引水』

これは、自分の田に水を引き込むことからできた四字熟語だ。意味は、「自分の有利になるように取りはからうこと」で悪い意味で用いられることが多い。私は初めてそのことを知ったとき、「なぜ自分の田に水を引いてはいけないの？他の人も自分の田に引けばいいのに」と思った。

母に聞くと教えてくれた。昔は水を自由に使うことができなかったそうだ。当時幼かった私は水が満足に使えない生活など想像できなかった。

しかし、五歳から中国で約三年半過ごしてきた、今の私には十分すぎるくらい理解ができる。中国では水道水が飲めなかった。特に耐性のついていない日本人が飲むとお腹を壊してしまう。移り住んでしばらくは、日本での生活が恋しかった。

中国では、ペットボトルやタンクに入った水を買って使っていた。もちろん出しっ放しにしようものなら、あつという間に無くなってしまう。中国での生活は、忘れかけていた水の大切さを思い出させてくれたものとなった。

やがて、日本へ帰国してまた元の生活へと戻った。蛇口をひねると、当然のように透明で安全な水が出てきた。そのことに私が感動していると、兄は言った。

「今回は中国で良かった。中には、普通の水が全く手に入らない国もあるからな。」

安全な水が手に入らない国の人々は泥水を飲んでるそうだと。考えると、こうして今持っている水をありがたげに分けてあげたくなくなった。

日本でも、学校に通うようになった。給食の前に友達と手を洗っていく。その時に、私は友達が使っていない蛇口を出しっぱなしにしているのに気づいた。

「水、出しっ放しだよ。」と注意すると、友達は悪びれる様子もなく言

った。「別にいいじゃん。水なんていくらでもあるし。」

私は呆然としながら、流れていく水を見つめた。この水があれば、いったい何人の人が救われるのだろうかと考えながら。

家に帰ってから、なぜこんなにも、人によって水の価値観が違うのか考えてみた。その友達だけではなく、これまで多くの人が水を無駄にしてきたのだろう。もちろん私もだ。

そこであの言葉を思い出す。

『我田引水』

私は意図してやっているわけではないが、安全な水がどうしても手に入らない人達の水を奪ってしまっているのではないだろうか。自分の利益ばかり考えてしまっていないだろうか。

考えても考えても、答えは出てこない。恵まれた環境にいる人ほど、見えてないものがある。

しかし、世の中には、安全な水をより多くの人に届けるために、募金活動などがある。もうすでに世界の状況が見えていて、それをどうにかしようと動いている人達もまた、たくさんいるのだ。

私達には、大事な使命が二つある。「気づくこと」と「伝えること」だ。確かに、昔と比べて水は豊富になったかもしれないが、その分、多くの人々が大切なことを忘れてしまった。

まずは気づく。そして、伝える。一見簡単そうに見えて、難しい。だからこそ、やりがいがあるのだ。もうやり遂げた人は多勢いる。次は私達の番だ。

だから、一文字一文字心をこめて、この作文を仕上げようと思う。いつか、世界中の人々が水の大切さに気づき、誰もが水を自由に飲み、使えるようになることを願って。

入選

生命を救う水

東京都 足立区花保中学校 三年 坂井 絢

いまだに収束をみせない新型コロナウイルス。この敵に立ち向かうために手を洗う。手にせっけんをのせ、とにかく泡立てる。コロナウイルスには手洗いが有効だということを聞いてからはよりマメになった。もちろんその間の水は流しっぱなしだ。私の目の前には「節水」の文字。けれど

「あと少しだから。ちよつとくらい。」

このちよつとが世界では当たり前ではない事を知っているつもりだった。二〇一五年の国連サミットによって決まったSDGs（持続可能な開発）では「誰もが安全な水を利用できること」が目標の一つに掲げられている。最初に聞いたときは理解ができなかった。安全って…？私は水道から出る水がぶがぶ飲んでる。特に部活で疲れた体にしみわたって気持ちが良い。しかし、世界の現実はそうでないことが調べて分かった。

世界で安全に管理された水を使うことができない人は、なんと約二億二億人。これは世界の人口の約三分の一にあたる。水道がない国では命がけで水を運ぶそう。この役割は子供や女性で、何時間も歩かなくてはならない。つまり、水を確保するためには収入を得る仕事をする時間がなくなったり、学校に通うことができないということだ。私は絶句した。蛇口をひねれば常にキレイな水が出てくる日本で、水のありがたさなど忘れかけていたからだ。キレイな水が当たり前の国は世界でも数えるほどしかない。貧しい国ではやっとの思いで手に入れた水に糞や尿、有害な物質が染み込んでるものにも関わらず、それらが処理されていなくそのまま飲み水として利用されているのだ。

手洗いが重要視されている今、こういった国々の人達はどのような思いでいるのだろうか。飲むだけでも貴重な水なのに手を洗う余裕などあるのだろうか。変異し続け勢いを増していくコロナウイルスを防げるか

もしれない手洗いができない人がいると思うと不安になる。私のちよつと水を無駄にした行為で救われる命があるかと思うと、なんてひどいことをしてしまったのか…と反省している。それと同時に、もつと平等に水を与えられることが当たり前になってほしいと思った。

その取り組みとして東京都水道局では発展途上国へ向けて、職員が培った実践的な技術力・運営力を活かした事業が行われている。諸外国へ出向いて安全な水道について教えたり、海外の人が来日した際には、水道局の施設で研修が行われている事も知った。こうした取り組みが多くの人に広がってほしいと思う。

また、自分個人としてもできることはないだろうか。

私の家のお風呂は一日に使った水量が表示されるようになっていた。意識的に水の使用量を減らそうと思い、昨日の値を調べてみた。その結果なんと五〇〇L！無意識にここまで使っているとは思わなかった。水との関わり方というものをもう一度見直そうというきっかけになった。

水は命の源であり生命を救う。

私にとっても世界中の人々にとっても水はかけがえのないものだと思う。そのためにできることはしなければならぬ。私ができることは節水だ。この二文字に含まれた深い意味をようやく理解できたと思う。だからこそ、水を流したままにすることなどはもうできない。蛇口を一回ごとに止める。シャワーの使う時間を短くする。お皿を洗う際はまとめて流すなど簡単にできることだ。こうした行動が水の恵みをもたらす、豊かな未来へとつながってほしいと願う。

入選

豊かな森を育むために

神奈川県

洗足学園中学校 一年

中井 美希

蛇口をひねると、きれいでおいしい水が当たり前のように出てくる今の日本。もし、水道から水が出てこなくなったら、たとえ一日でも私は困り果ててしまうでしょう。

水を守り続けるために、自分には何ができるのでしょうか。

水は森に育まれます。そして水は森を育みます。

私はよく家族とトレッキングに行きます。「どんなところに行きたい？」と問われると、私は必ず「滝」と答えます。大きな岩を乗り越え、滝つぼまで行き、滝のすぐそばで浴びる水しぶきが好きです。

滝のある山が好きなのは他にもあります。美しいせせらぎ、しつとりとした空気、多種多様な植物、ふかふかとした土。美しい滝への道のりは、豊かな森を感じられます。

ふかふかとした土は、上に蓄積している落ち葉や、土に住む動物や微生物たちの動いた跡やフンなどによってすき間ができていて、スポンジのようになっていきます。

スポンジのような森の土に吸い込まれた水は、その上にかぶさっている落ち葉によって蒸発しにくくなり、じつくりと時間をかけて、地下へ地下へとしみ込んでいきます。地中の小さなすき間を通ることで、ちりや汚れがとれるとともに、土や岩の中のミネラルが溶け込んでいきます。そうして、おいしいきれいな地下水ができます。

豊かな森が、ときには何十年もかけて、水を育てているのです。

では、森林が多ければ、五十年後、百年後も水は守られるのでしょうか。

日本の国土面積に占める森林面積は六割以上あります。ですが、そのうちの四割を占める人工林には、放置されてしまった荒廃林がたくさん存在しています。

荒廃林が増えた理由には、戦後に広葉樹を伐採して杉やヒノキを植林

したものの、安い外国産の木材が輸入されたために国産の木材の価格が暴落し、採算が合わず放置されてしまったことや、後継者不足、就業者の高齢化などがあります。

間伐や枝打ちなどの整備がされていない人工林の中は、まるで満員電車のように細い木々が立ち並び、林の中は日光が届かず真つ暗で、草木の根が張りません。そのため、雨が降ると表面の土が流されてしまい、雨が土にしみ込まないので、地下水もできません。

このような状況で大雨や台風などが発生した場合、根が水を吸いきれずに、土砂崩れが発生しやすくなってしまうのです。ただ木を植えて増やすだけでは、水を育む豊かな森にはならないのです。

では、人の手で豊かな森を作ることにはできないのでしょうか。

人工林であっても、木を植えた後、下草刈り、枝打ち、間伐などの手入れを継続することで、残した木の幹が太くなり、しっかりと根を張れるようになります。

手入れをすることで、森の中に日光が差し込み、今まで発芽できなかった色々な木の種子が育ち、本来の豊かな森への再生を目指すことができます。

日本で利用する木材の七割以上は、安い輸入木材です。間伐材も出荷すると赤字になるため、山から出さないことが主流です。日本の森林資源は使われず、使われないから森が荒廃していくという現状があります。日本の木を使い、林業が盛んになることで豊かな森が育まれているのです。

今の私にできることは、現状を知ること。また、日本の木材を選んだり、活用方法を考えたりすることが、水と、私たちをとりまく自然環境を守っていくのだという意識を持ち続けること。そしてそれを、周囲の人たちにも伝えていくことだと感じています。

入選

命の源・水

富山県 高岡市立戸出中学校 三年 稲場 結奈

今年の三月私の祖母は癌と診断されてから食事をほとんど取らなくなつたが、水を欲しがらる様になつた。水を一口飲むと、細くなつた食道からゴクリと音がして「あーおいしい。」と何とも言えない表情をする。その柔らかい笑顔は私を幸せな気持ちにさせてくれる。祖母にとつて一口の水が命の源になつていると実感させられる一瞬だ。

昨日、宿題をしていると祖母が「喉が乾いたから水ちょうだい。」と言つた。「この問題解いたら持つてくるね。」と言うと同時に台所で夕食を作る母が「今すぐ水取りにおいで。」の声。蛇口をひねりながら「後少しで数学の問題解けそうやったんに。」と恨めしく言う私に母は「何キロ先まで水を取りに行つてとは言つてないちゃ。たつたの八歩か九歩や。」と笑う。

その時、以前テレビで見た発展途上国の映像を思い出した。生活に必要な水を得るために、水汲みという重労働を女性や子供が家族のために毎日何時間もかけて行つていた。そして映し出されている水の色は茶色く濁つていて祖母が飲むとき通つた安全な水とはかけ離れていた。その国の人々はそれを生活用水として使っている。体や顔を洗い、洗濯をし、そしてその水を飲むため、単純な下痢性の病気で毎日の弱い人や子供達が何人も命を落としていた。もし水道施設が整備され、水によつて命が奪われる事がなくなり、祖母が飲む水のように命の源になる。

水は人間が健康な生活を送るために真つ先に必要なものだと思う。私達は自分達の国だけ良ければいいというのではなく、途上国が十分に安全な水を得られるよう支援し技術や資金を提供することも国際社会における日本の重要な役割だと思ふ。水によつて消えてゆく命と水によつて生かされる命。同じ地球上、同じ命。水で悲しいことがあつてはいけないことだ。水が簡単に手に入らない国や地域があるとい

うことを把握することでもいかに水が素晴らしく重要な存在か、そしてこれから先進国として水とどう向き合つていけば良いのか考えなければならぬ。今、私達ができることは、水を汚さない、無駄に使わないといった当たり前のことではもちろん安全な水が足りない社会に住む人々に心をとめ、できる限りのことをすることだ。

私は小学六年の夏休みに人権を考えるとというセミナー合宿に参加した。友達になつた福島の子から教えて貰つた話は、東日本大震災のあの日不安や心細さでパニックになりそうになつたけれど隣に立つていた人からペットボトルの水を貰い一口、二口と飲めたことで少しだけ落ち着くことができたのかもしれないという体験談だ。水が人を癒す力があることを知れた夏だった。

普段、自分が水をどう思つて、どう使つてゐるか。生活を振り返つてみると日本の豊かな水の尊さがわかる。私は蛇口をひねれば透き通つた安全な水が止めどなく流れること、コンビニエンスストアでも簡単に水を手に入れることに感謝すると同時に、できる限り早く世界の水環境が改善され、誰もが癒される命の源・水と共にある生活が送れるようになればいいと思ふ祈る。

入選

日本の水の恵みは持続可能なのか 愛知県 名古屋女子大学中学校 三年 大和田 典子

私の祖父は、美しい里山の住人です。屋号を池下と言います。昭和三十年頃まで裏山に池が有った事から呼ばれています。家の周囲には、水路や井戸が有り、田んぼの時期になると、沢の水が水路に流れ出ます。コトコトと音を立てながら勢い良く流れる水音が好きです。水辺では蛍や様々な生物達が活発に活動する時期です。蛙はとても不思議でいつも鳴いてると思っていました。一匹が鳴き出すと大合唱が始まります。そしてびたつと静寂が訪れます。面白いです。一番のお気に入りの景色が有ります。それは、代かき後に田んぼが水鏡になり、周りの景色が映り込み、田んぼ一つ一つが、パズルのピースの様になります。空の色が時間と伴に変化していく様は絶景です。薫風も感じ心が穏やかになります。この絶景を眺めたのは、令和元年の大型連休でした。祖父の所には、お盆やお正月に訪れる程度でした。

祖父は共に、昭和十年代生まれで、八十歳前後になります。畑を五町歩（東京ドーム一個分）陸稲や大麦を耕作し、田んぼを二町五反歩と畑の半分程耕作しています。大型機械を利用していますが、祖父母だけでは大変になってきています。どちらかが体調を崩したら耕作を諦めるしかないなど聞く機会が増えています。少しでも役に立ちたいと思い田植えを手伝いに行きました。

いざやってみると、とても難しく、体中が痛くなる重労働でした。まず、田んぼを歩くのが難しく、長靴も重く感じました。私は、端を任せられたのですが、真っ直ぐに植えるのが、列を振り返ると難しく、浮いている苗を見ると情け無く感じました。それでも、四日目にもなると少し上達してきて、祖父母にほめられてうれしくなりました。毎年手伝うと約束しましたが、コロナ禍でそれ以来、訪れる事すら出来ていません。とても残念で寂しいです。

そして、昨年には、以前から恐れていた事件が起きました。民家周

辺の田んぼが猪に荒らされてしまいました。稲穂が垂れ始めた時期で、祖父母は落胆していました。収穫量の減少とコロナ禍での新米価格も下落し、農家が廃業したニュースも聞きました。

祖父母の住む里山でも、高齢化や継承者不足で耕作放棄地が増えてきています。山間部の田んぼは数年前から、猪の被害を受けていて、あぜも土手も道も破壊され、耕作放棄地となつていきます。そこを住処として、里山に出没する様になりました。対策は、電気柵を使用します。農地を電気柵で囲うので費用が掛かります。管理も必要です。稲作は、水の管理や草切りがとても重要です。そこに、野生動物とのたたかひも加わり、負担ばかり増えて収入がマイナスなら、生産者の苦悩は計り知れません。放棄地が増加していきます。

農地減少は、農地が持つ様々な機能が失われていきます。農地は作物を作るだけではありません。雨水を蓄え、時間を掛けて地下水となり、ゆっくり下流へ流れ生活用水などに活用されています。洪水や土砂崩れを防いで良質な水を作っています。水田では蒸発、作物の蒸散により、空気を冷やし、周辺市街地の気温上昇を抑えます。継続的な耕作が、多くの生き物の生態系が保たれる事につながっています。

森や山林の保全、里山の保全はとても重要です。日本は、耕作できる土地を自ら手放し輸入に頼っています。飢餓で苦しんでいる国に申し訳ない気持ちになります。日本でも保全活動に国民が関心を持たなければ、蛇口から安全な水が供給されていた事があると言う未来になってしまいうでしょう。

今の私にできる第一歩は、水の恵みを守る為に保全活動に関心を持ち、第一次産業を支援できるように、地産地消を心掛けて行くことだと思います。

入選

受け継いでいくために

三重県 高田中学校 一年 富永 麻央

まず、「水」という言葉から思い浮かぶものについて考えをめぐらしてみた。

水といえば――。自分に問いかけてみる。まず、真つ先に思い浮かんだのは、水道の蛇口から勢いよく流れ出る水。蛇口をひねれば、とめどもなく清浄な水がほとぼしる。並々と注いだお茶も、たつぷりのスープレももちろん、流水でさらしたり、多量の水で茹でることもいとわれない。また、湯船に温かい湯を満たしたり、きれいになるまで、いくらでも掛け流して洗うこともできる。普段は、その恵みに感謝の気持ちすら考えることもない。それが当たり前だと思っていた。

しかし、小学生の時、ある医師の物語を知った事を思い出した。二〇一九年に凶弾に倒れた、中村哲さんである。中村さんは、アフガニスタンで、不可能だと言われた約二十五キロの用水路を砂漠の大地に開通させ、不毛の土地を緑のじゆうたんに変えた、奇跡の人だ。一面、砂と石だらけだった硬い砂漠が途方も無い努力により、緑あふれる、豊かな、麗しい草原へと変じたのだ。私は、事後のあまりの違いに本当に同じ土地なのか、と目を見開き、胸が熱くなった。死んだような土地が、生き返り、むしろ、まだまだいけるとばかりにみなぎるような生命力にあふれかえっている。水の力は偉大だ。

中村さんの言葉にこんなものがある。

「絶対に必要なものは多くはない。恐らく、変わらずに輝き続けるのは、命への愛惜と自然に対する謙虚さである。その思いを留める限り、恐れるものは何もないと考えている。」中村さんの「なんとしてでも、やり通す」という強い志が、茶色い乾いた砂漠を、緑と人々の活気あふれる豊潤な大地に変貌させたのだ。水は数少ない絶対に必要なものの一つなのだ。そして、この用水路は中村さんの想い、人生そのものなのだ。彼だけだけでなく、これほど、多くの人々の人生を拓く可能性と展望に満ちたも

のが、水の他にあるのだろうか。水は、人間にとってはもちろん、動物や植物も、人間の興す産業や工業にも、必要不可欠である。つまり、水は生命にとって、なくてはならない根源であり、持続に必須な何にも代え難いものだ。

しかし、先進国を中心に、人口増加に伴う水問題も増えてきた。海への、汚染水の排出や漁かく用ネット、マイクロプラスチックによる、水質汚濁だ。ウミガメや海鳥が、ゴミを誤飲したり、ネットにからまり、もたえる映像は、私の脳裏に焼きついていて。思い出す度、胸を押さえられるようだ。今や水が循環していることは、幼い子供でさえ知るところだ。無かったことにすることのごとく、汚物や汚水を流してしまえば、汚れた川や海になる。そして、汚い大気を吸着した汚い雨が降りそそぎ、大地をも汚染する。全てが我身に返ってくるのだ。できるかぎり、心地悪い循環ではなく、心地良い循環が望ましいのはいうまでもない。あれほど渴望した水だったはずが、いったん継続的に手に入るとなれば、随分ぞんざいに扱われる。無かったことにした水は、また後世に間違いなく返ってくるというのだ。

私は、このゴールデンウィーク中、特に節水を心がけた。歯みがきをする時はコップに水をため、手洗い時もこまめに水をとめた。不思議と、明るい気分になった。

これからも、節水や排水の行先を意識し続けたいと思う。ふんだんに使用する水を浄化させて排出するのは、大変な労力を要するはずだ。より節水できる場面と過度に汚染された排水を抑えるよう、考えてみたい。私達は水に恵まれている。だからこそ、それに甘えず、水について考え続けることが肝要だ。世界の水問題にも目を向け、些細なことでも協力したい。かけがえのない水と地球を大切にして、受け継いでいくために。

入選

大海の一滴

京都府

八幡市立男山東中学校

三年

井口

慎之介

九州の佐賀県の小さな離島に曾祖父が住んでいる。今年で満九十七歳になる。毎年夏休みには必ずいとこたちと帰省していたが去年はコロナの影響で帰省できなかった。曾祖父は九州弁で話すので言葉は聞き取りにくい、僕がそばに行くといつも頭を撫でて「大きくなった」と喜び、しばらくすると戦争の話始めた。食べ物はもちろん、飲み水にも苦労していたと話した。僕たちが水道をひねり水を流しっぱなしで手を洗っていると、曾祖父は決まって「もったいないから水を止めなさい」と言う。僕はときどき、この「もったいない」という言葉を思い出し、節水を心がけている。

日本に住んでいる僕たちのほとんどは、水道をひねれば当たり前にきれいな水が出てくる環境で生きている。その水はそのまま飲み水として使用することができるほどである。こんなにもきれいな水を使い、僕たちは掃除や洗濯をしている。果たしてこれは、世界中でも当たり前なことなのだろうか。

小学生の頃、僕と同じくらいの年齢の子どもたちが水を汲むために何キロも先にある川まで歩いているのをテレビで見た。その水は日本で暮らしている僕たちにとつては、「きれいな水」と言えるようなものではなかった。彼らは生きるためにその水を生活用水として使用していた。もちろん飲み水としてもだ。僕は何ともやるせない気持ちに包まれたことを今でも覚えている。

多くの発展途上国では浄水処理をしていない水を飲み水として使用し、年間で一五〇万人以上の子どもたちの命が失われているそうだ。生きるために飲んだ水で、命を落とす。こんな悲惨な現状の中、僕たちにできることはあるのだろうか。今はまだわからないけれど、こんな事実があるということを決して忘れてはならないと思った。

近年、日本だけでなく世界中で想像を絶するような水の災害が起きて

いる。水の星、地球。水の恵みによって育まれてきた生命が、今、水によって奪われている。環境破壊による地球温暖化も深刻化している。それらを食い止めるためには、限りある資源を大切に、持続可能な社会を創っていくことが大切だ。

僕は曾祖父の住む九州の海が好きだ。透き通っていて、小さな魚たちがたくさん泳いでいる。そんな九州の海も、海岸にはどこからか漂流してきたペットボトルなどのゴミが大量に打ち上げられている。海洋汚染もまた、人間の生活が大きく影響している環境問題の一つだ。海の無い県を流れる小さな川でも、マイクロプラスチックが採取されたという。海洋汚染を防ぐためにも、僕たちの日常生活をもう一度見直すべきだ。

去年、僕の曾祖母が亡くなった。曾祖父と同じ九十六歳だった。曾祖父のようにおしゃべりではないが、いつも優しい笑顔で見守ってくれていた。葬儀の時、僕の間からは自然と涙があふれた。涙の塩分濃度は原始海洋の濃度と同じだそうだ。涙も海水もしよっぱい水であることに変わりはないが、涙のようにいつまでも美しい海であってほしい。

入選

美しさを取り戻して

京都府

京都市立向島秀蓮小中学校

九年

村川 和

二〇二〇年、世界は新型コロナウイルスの流行により、それまで出来ていた当たり前のことが出来なくなりました。私たちは我慢が基本の生活に変えなければならなくなっていました。日常の外出や娯楽が制限され、街の店が閉まり、人々の姿が消えた。学校も臨時休校になり、毎日不安な日々を過ごすことになった。

そんな三月のある日、新聞でも興味深い記事を見つけた。イタリアの世界遺産の街ヴェネツィアで、街中の運河の水が改善されたというものだ。水が透き通り、普段は濁っている水の中で泳ぐ小さな魚、ボートの行き来が途絶えた運河を楽しむ鵜、シラサギなどの鳥、クラゲの泳ぐ姿が見られたという。

ヴェネツィアはアドリア海のもっとも奥にありヴェネツィア湾のラグーナの上に出た、運河が縦横に走る水の都である。かつてはイタリア本島から離れた孤島であったが、リベルタ橋が開通し本土との自動車での往来が可能になった。しかしヴェネツィア島内での自動車での移動は規制され、路地や橋の通行はできない。そのため何世紀にもわたり、運河を進む舟が交通の主要手段として存在している。以前は、ゴンドラと呼ばれる手漕ぎ舟が物資を運んだり人々の移動にも使われていた。近年では、そのゴンドラが運河を巡る観光の目玉となり、また観光地へ向かう交通手段として存在しているそうだ。他にも水上タクシー、水上バス、渡し船などが島民の生活を支えている。

このようにヴェネツィアは、長い歴史の中で水と共生した生活を送っている。しかし、運河の水質がコロナ禍で改善したということは、その前は悪い状態であったということだ。

改善された要因は何か。ヴェネツィアの運河の水は通常、底にたまった泥が観光や生活のためのモーターボートで巻き上げられたり、観光客の捨てたポリ袋やごみが浮かんでいたり汚染された状態だった。しか

し、コロナウイルスの流行により、人々の移動が制限され、観光客の姿もなく、水上交通量が減少した。そのため、皮肉にも水質が落ち着いたということだ。観光という人間の娯楽を始め、生活でも大切な水を汚してしまっていることに私は危機を感じる。

ヴェネツィアに限らず、人の暮らしの上で水は欠かせない。飲んだり料理に使ったり、お風呂やトイレ、洗濯など一日に一度も水にさわらない日はない。日常生活だけでなく、農業や工場、スーパージンなどでも大量に使う。それなのに、過去には自然に分解されない物質をそのまま排水したり、人間のエゴにより勝手なことを繰り返してきた。

私たちは今後、過去の過ちを反省するだけでなく、これ以上の悪化を防ぐためにも、人間の知識をもって取り組みなければならぬ。

私に今出来ることは何か。日々の生活の中で、油や自然分解されない成分の入った洗剤を使わないなどはすぐ出来そうだ。調べていくうちに、使い捨てカイロを加工して水質を改善するという記事を見つけた。カイロに含まれる鉄と、ヘドロに含まれる硫化水素が結合し悪臭が減り、ヘドロそのものも分解され水質改善に繋がるとのことだった。使い捨てカイロを集めてその取り組み先に送ったりすることも出来そうだ。

ヴェネツィアに関して、また新しいニュースがあった。二〇二一年三月、運河の水位が五十センチほど干上がってしまった、通行に支障が出ているらしい。原因は高気圧で、雨量が少ないことだそう。このように人の暮らしは、様々なことに影響されるが、それを踏まえ、資源を大切に毎日丁寧に暮らしていきたい。

入選

蛇口をひねれば、

大阪府

大阪教育大学附属池田中学校

三年

藤山

ゆかり

「蛇口をひねれば、ミネラルウォーター」

夜の街に、水色の案内板と銀色の冷水機がぼんやりと浮かんでいる。

一昨年の夏、初めて訪れた熊本。不思議な組み合わせの言葉と青く柔らかな光に包まれた水飲み場は、とても幻想的だった。世界の水道普及率は年々上昇しているが、蛇口から出た水を飲むことができるのは、十カ国程度だという。熊本県の水道のように全て地下水を使用する地域は日本でも珍しく、他国からするとこれはまさに夢のような光景だろう。

水源に行ったのは、滞在の最終日だった。緑豊かな境内にある泉は、私の膝ほどの深さだろうか。澄みきった水の中を小さな魚が泳いでいる。水底では砂が舞い上がり、水面を優しく揺らす。この水が森の清流を通り、市内を流れる川を経て、やがて海にたどり着く。水神が祀られた厳かな地で、力強く湧き上がる水。阿蘇山、白川、有明海。壮大な自然の力が集まり、あのミネラルウォーターに繋がるのだ。大昔から自然を敬い、美しい環境を守ってきた人々の思いに触れた瞬間だった。

ユニセフによると、二〇一七年時点で世界の約七割の人が「安全に管理された飲み水」を用いているという。逆を言えば、残り三割の二十二億人ほどが「自宅にあり、必要な時に入手でき、排泄物や化学物質によって汚染されていない、改善された水源から得られる飲み水」を利用してきていないのだ。その中で、日本の水道普及率は九八%にも上り、全てが高い水質基準で維持管理がされている。

私が住む大阪府北部の町は水道の約九十%を淀川から汲み上げている。その水源となる琵琶湖の水は、滋賀県だけではなく、瀬田川や淀川を通じて京都府や大阪府、兵庫県でも利用され、近畿の人々の生活を支えている。「近畿のみずがめ」である琵琶湖も、かつて「水の都」であった大阪の川も、経済発展と共に家庭や工場の排水などで汚れ、今は高度な処理技術で飲み水を得ることができている。だが、流域の環境を守れな

れば、水の質や量を保つことは困難になっていく。だから、私たちは人任せではなく、自分の問題として取り組む必要があるのだ。個人にできることは小さいけれども、それが集まると大きな力となる。日常で使用する水を汚さないこと、使用量を抑えること。それから、生活で使う製品はできるだけ環境に配慮したものを選ぶことも有効だろう。間接的にあっても水問題と必ず繋がるからだ。水は生活のあらゆる場面で利用されている。家庭や公共施設などで使われる生活用水だけでなく、工業や農業、畜産にも大量の水を必要とする。私たちは利便性の高い快適な暮らしを求めて、どれほどの水を無駄にしてきたのだろう。私たちが浪費した水は、どれほどの人の命をつなぐことができる量なのだろう。

地球の資源には限りがある。それは誰の所有物でもない。生きるために皆で分け合い、大切に使用して頂くものだ。必要最小限の利用に努め、適正に配分し、未来に繋げていくのが、恵まれた国にいる私たちが果たすべき役割ではないだろうか。

いつでも安全な水が入ることは、「当たり前なこと」ではない。その地に与えられた自然の恵み。時代を超えて守り続けてきた人々の思い。震災や風水害、コロナ禍の現在においても、安全な水を届けてくれる多くの方々の努力。そういった「有難いこと」への感謝を忘れず、受け取った水その先を考え、責任をもって使うことが必要なのだ。

地球は今、たくさんの課題を抱えている。これからは誰も解いたことのない問題に向き合い、ひとりひとりが行動をおこさなければならぬ。世界中の全ての人が「蛇口をひねれば、安全な水」を得られる未来のためにも。

二〇三〇年はもう、すぐそばに来ている。

入選

水のパレード

奈良県 奈良県立青翔中学校 三年 小林 大悟

今、私の手元に一枚の写真があります。近所の敬老会で披露された、五十年前の写真です。今では見なくなったボンネットバスを従えて、おかっぱ頭や坊主頭の小学生達が、体操服で意気揚々と行進しています。これは、私の住む地区から、十kmほど離れた市内へ向けて行われた、「水のパレード」の様子です。

近所のおじいちゃんおばあちゃん達が、この時の様子を教えてくれました。歩き疲れて、交代で後ろのバスに乗ったとか、私のおじいちゃんが一番前を歩いていたらとか。何より、山の上の水を市内に届けることに誇らしさを感じていたそうです。

私の住む地区は、春日原生林の更に東にある、北村町と言う山奥です。元々は、東里村と呼ばれていて、奈良市ではなかったそうです。それまで奈良市内では、お隣の京都府にある木津川から引いた水を飲んでいました。戦後、市内の人口が増加し、水源を私たちが今住んでいる地区を流れる「白砂川」「布目川」に求めることを決定したのです。そのため、東里村は奈良市に合併され、「白砂川」「布目川」も、奈良市内に併合されました。そして、昭和四十年、須川ダムの建設が開始され、その四年後、昭和四十四年にダムは完成しました。水のパレードは、それを記念して、いち早くきれいなお水を届けよう、ということで行われました。昭和三十四年頃から、昭和四十年まで、北村町付近、東里地区の小学生だけでなく、奈良市内の小学生も参加して、行っていたそうです。二kmずつを、ひとりひとり交代しながら歩いて、「布目川の水を市内へ届けよう」と書かれた横断幕まで掲げていたそうです。

白砂川は、所々に砂の河原のある、優しい流れの川です。決して木津川のような大きな川ではありません。そこにダムが造られました。須川ダムです。いくつかの家が、今もダムの底に残されているそうです。工事進み、やがて奈良市内に東部の水が届きました。昭和五十年くらい

のことだそうです。

しかし困ったことに、肝心の我々の地域はそれから長い間、水道の水を使えませんでした。今もあちこちにありますが、井戸水を使って生活していたのです。その井戸が取水工事の後、数多く枯渇したそうです。地下で何があつたのかはわかりませんが、とりあえず簡易水道で村落を賄うことにしました。祖母などはこの水を不安がつて、さらに浄水器を通して使っていました。簡易水道は、雨が降りすぎると濁ったり、カルキを交代で投入したりと、管理に苦労したようで、父は曾祖父と一緒に見に行った記憶があるそうです。

この後、平成四年には布目ダムも完成し、奈良市内の水の供給は安定しましたが、私の住む地域は最後の最後、平成十四年にやっと浄水場の水が届きました。今では町の皆さんと同じ水道水です。

今私の家の前を流れる水がまわりまわって水道から出てきます。水のパレードが帰ってきた思いです。思えば長い旅です。コストもかかっています。大切に使わなければと思います。畑や庭の木々に使う分は、雨水や川の水も利用し、日常生活での節水に心掛けています。そして村のおじいちゃん達と同じように、この水源をいつまでも誇りに思つて、大事に守っていききたいです。普通に蛇口をひねれば安全な水が出てくることに感謝しながら。

入選

生命を繋げる水

和歌山県

和歌山県立田辺中学校

三年

寺段

愛良

二〇二二年二月NASAが二〇二二年に次いで二度目の火星探査車を着陸させた。生命が存在していた証拠を探すために。そして四月二〇日火星で二酸化炭素から酸素を作ることに成功したと報じられた。二月に着陸した火星探査車に搭載された装置において、火星の大気中の二酸化炭素から酸素を作る実験が行われ、無事成功したのだ。なぜ火星で二酸化炭素から酸素を作る実験をしたのだろうか。その理由は、「人類は火星を目指しているから。」この理由に尽きる。つまり火星移住だ。そのために様々な技術開発を手掛けている。そもそもなぜ人類は宇宙に行くのか。その理由として、数十年から数百年程度の未来には、地球環境の変動や資源の枯渇、さらに遠い未来を見通せば氷河期の到来、隕石の衝突、大陸の変動など、様々な激しい環境変動が地球と人類を待ち受けているからだと言われている。

私には想像を超えた内容であり、ただの物語のように受けとめてしまふ。しかし、実際この地球でおこっている物語であるなら、私も主人公の一人であることは間違いない。ふと机の上に置いている地球儀を眺めてみた。きれいな球、そして広がる青。こんなにも美しい青が広がる地球の未来が危ぶまれていることに、腹だたしさを感じ、何も出来ない自分にむなしさを覚えた。そして、本当に何も出来ないのか、また何もしていないのかと考えることにした。広がる青は海。つまり地球上には七割の海が存在し、地球上の水の九七パーセントが海にある。太陽からの熱でそれが蒸発して雲になり、雨となって陸を潤し、また海に戻る。そのような壮大なスケールの水循環の過程でおびただしい数の生物が養われ、また気候が安定する。このように海は地球上の生物と環境に大きな役割を果たしていることがわかる。つまり、生物の生存に水が必要なことは明らかで、この水循環の過程が維持出来なければ、地球から生物が存在しなくなるということが言える。

物心ついた時から言われている「水を大切にしよう。」「海をきれいにしよう。」難しいことはわからなくても、私達は気付いた時には、水や環境へのキーワードのもと、標語やポスター作り、道徳や理科の授業で学びを深めてきた。そして今、私が気になる言葉にSDGsがある。その目標の中でも特に「一四海の豊かさを守ろう」だ。海の汚染がより深刻な問題となっているのは、私の目から見ても明らかであった。海岸にはゴミが無造作にうちあげられ、それらを口にした生物の危機的状態、傷つき命を奪われた姿を目にすることも少なくない。そして特に地球を脅かしているのがマイクロプラスチックだ。人々が生活する上で使用するさまざまなものに使われている、直径五ミリメートル以下の物質。自然界に存在しないものは、自然におこりうる循環にとけこみ、存在していることが不可能なのだ。そして今の現状のまま増加し続ければ、二〇五〇年には魚の量を上回るマイクロプラスチックが海に存在することが予測されている。この事実を知り、私が出発することは何か考えた。何かを購入する際は、まず原材料を確認してプラスチック製品の購入を可能な限り控え、紙・木など自然に近い素材を選択することが中学生の私に出来る一歩だと思う。そして、様々な奇跡の中で存在しうる全ての生命が循環し、命がつけられるよう、水への感謝を忘れず、今後維持・継続できる美しい地球を後世に伝えていきたい。

入選

世界を変える雨水

広島県 近畿大学付属広島中学校東広島校 三年 牛垣 結

世界的に水不足が懸念される近年、「雨水利用」という言葉が注目されている。雨水利用とは、建物の屋根等に降った雨をタンクに溜め、溜めた雨水を色々な用途で活用することだ。代表的な用途の例を三つ挙げてみたい。

一つ目は植物への灌水だ。雨水には、空気中の窒素分が溶け込んでいため、肥料成分として働き、植物の成長を促すことにもつながる。二つ目は雑用水としての利用だ。自動車やアウトドア用品、ペット用品や園芸用品等を洗うために使用することができる。雨水が由来だから、必要量でしっかりと洗うことができる。三つ目はトイレの洗浄水だ。実は一般家庭の場合、水道の使用量で最も多いのはトイレの洗浄水であるため、雨水を使用することで、エネルギーを使って浄化されている水道水の利用量が減り、環境にも優しくなる。

この様に、雨水は主に水道用水ほど良い水質を求めている家庭用水に利用されている。

そのような雨水利用には、嬉しいメリットが他にもいくつかある。

一つ目は、前途の水道水の利用が減ることにより、水道代の節約が期待できることだ。二つ目は、大規模災害による断水時の生活用水にもなることだ。地震や豪雨等で被災した時に雨水を溜めていけば、断水時でも最低限の水を使うことが出来るようになるだろう。三つ目は、近年特に顕著な都市型洪水の軽減だ。都市で雨水利用が十分に普及すれば、都市で降った雨が家に一時的に留まるため、道路に注がれる雨水の量が減少すると考えられている。四つ目は、環境教育に最適だということだ。溜めた雨水がなくなると水が出なくなるため、蛇口を捻ればきれいな水が出る時代に生まれた最近の子供たちでも、「水を大切に扱わなければならない」という気持ちを生みやすい。「もったいない」という気持ちが生まれ、水の流しっぱなしはもろろん、照明やテレビ等の無駄な使用も減っ

たという人もいるようだ。

その一方で雨水利用にはデメリットもある。雨水には、屋根や雨どいにあつた虫の死骸や空気中のチリ等が溶け込んでいるかもしれないため、飲み水としての利用はそのままでは難しい。又、降水量の変動が大きく、確保できる雨水の量が不安定だという地域もある。

しかし、雨水利用のメリットの方がデメリットよりも大きいため、近年の雨水利用施設数と雨水利用量は共に増加傾向にある。

私は、この雨水利用は環境への負担を軽減すると同時に、人々のエコ意識を向上させる、非常に良い手段だと思う。だから私は、水を沢山必要とする国内の各家庭に普及して欲しいと思う。さらに国内だけでなく、海外の発展途上国にも普及させることが出来れば、SDGsの六「安全な水とトイレを世界中に」という目標に近づくことが出来ると思う。そのために、先進国が協力して、水不足に苦しむ世界中の人々を救うことが出来る、私は考える。合わせて、雨水を飲料水として利用できる水にするためのろ過装置も設置できれば、現地の人々の健康維持にも寄与することが出来るのではないだろうか。

私は、雨水利用は世界中を変える、大きな力を秘めていると思う。雨水利用は、世界中の水不足に苦しむ人々に救いの手を差し伸べ、人々を勇気づけるだろう。私は、世界中に雨水利用が広がり、人々が笑顔で生活できるような社会を思い描いている。将来を担う私たちには地球に優しい暮らしがこれまでに以上に求められているため、雨水利用を通して、私たちが環境ファーストな世界をつくっていききたいと思う。

入選

今の私に出来ること

山口県 周南市立桜田中学校 三年 山下 莉華

私は花を育てることが大好きだ。育てた花が綺麗に咲きほこる姿を見てみると、とても幸せな気持ちになる。ホースをのびし、朝夕たっぷりの水をあげるのが私の日課だ。そのホースからは、そのまま飲むことが出来る澄んだ水が出る。少し前まで、私はそれが当たり前だと思っていた。

ある日私は、ラジオから流れてきたCMを耳にして、衝撃を受けた。

「マダガスカルの子供たちは、水を汲むために険しい道を毎日何往復もする。それでも手に入るの、飲めば命を落とすかもしれない汚れた水。命の水、だけど命がけの水。」

その言葉は、しばらく私の頭から離れなかった。私は、マダガスカルについて調べてみた。そこには、私よりも小さな子供が、炎天下のなか濁った水を運ぶ姿があった。水を運ぶために学校にも行けず、やつと手に入れた水で、命を落とす子供も多いそう。

実際、世界では二十億人以上の人が安全な水を使用することができず、毎日六千人もの子供たちが亡くなっている。

日本に産まれた私は、蛇口をかるくひねるだけで、綺麗な水を使うことができる。世界では、二人に一人が安全な水を使用することが出来ずにいるというのに、私たち日本人はたった一人で、一日に三百リットルもの水を使用している。

SDGsでは、六番目に「安全な水とトイレを世界中に」という目標が掲げられている。

安全な水を使用することが困難な地域は、サハラ以南のアフリカ諸国に多い。日本から遠く離れたその国の人達のために、私でも出来ることは何だろうか。

「まずは自分で調べて、水問題の現実を知ることが大切なんじゃないのかな。」

と、母は言った。

確かに、母の言う通りだと思う。世界中の水問題について深く調べていくうちに、それはかなり深刻なものだと分かった。飲み水だけでなく、整備されたトイレを使用することができない人は四十二億人にも及ぶ。世界の六割の人が、排泄物によって汚染された水の影響を受けているのだ。だから、トイレを整備することで、綺麗な水源から安全な飲み水が得られるようになることも知った。

近年SDGsの目標に取り組み、トイレの設置や、古井戸の改修工事を行う企業が増えていく。これらの支援により、子供たちは水を運ぶ必要がなくなり、教育を受けることができるようになった。

また、水を綺麗にする浄化剤を開発した企業もある。一錠で約五リットルの水を綺麗にできる浄化剤は、三百円で千錠買うことができる。これにより、子供たちが安全に水を飲んだり、洗い物をしたりすることができるようになった。たくさん命を救う技術は、本当にすごいと思う。私には誰かの役に立っている技術は全く無いけれど、その浄化剤を知ってから、ユニセフの募金箱に、毎日百円入れるようになった。まだ始めて間もないけれど、これを一年間続けければ、私の募金だけで二トンもの水を綺麗にすることができるのだ。

直接携わることにはできないとしても、募金という形で、綺麗な水を届けることができる。そして、子供の命を救い、未来につなげるための架け橋になればと思う。

世界に目を向けて現状を知ること、私の意識は随分と変わり、募金もより意味のあるものになった。募金は、今の私に出来る持続可能な活動だ。「安全な水とトイレを世界中に」というSDGsの取り組みに、これからも関わっていききたい。

私は今日も花に水をあげながら、この綺麗な水が、一日でも早く、世界中に届くことを願っている。

入選

生活に関わる貴重な水

愛媛県 今治市立伯方中学校 三年 村上 千紘

私には今でも忘れられない光景があります。二〇一八年の夏に起こった西日本豪雨です。今まで経験したことのない大雨で、二六三人の方が亡くなり、たくさんの負傷者を出す大災害となりました。私の住む町でも、いろいろな所で土砂崩れが起きました。私が目にした光景は、すさまじいものでした。山から流れた土砂と折れた木で一面覆われた道路。裏山が崩れて、土砂が押し寄せていた友達の家。川が氾濫して水に浸かった建物。この災害の後、町ではしばらくの間断水が続きました。一夜の雨が町の姿を変え、人々の気持ちを不安にさせました。

それから数日の間、ニュースでは各地の被害の様子ばかり放送していました。被害の一つにダム of 緊急放流による川の氾濫がありました。私はこのニュースをきっかけに、ダムについて調べようと思い立ちました。ダムが作られる目的の一つは「治水」です。大雨が降った時に川が氾濫しないよう水の量を調整することを言います。もう一つは「利水」です。田畑に水を送ったり、生活用水を用意したりすることです。各地で行った緊急放流とは、大雨が降る前にダムの水を減らす事前放流を行ったにもかかわらず、ダムの水がいっぱいになり、ダムに入って来る水とほぼ同じ量の水を放流することです。

家族で出掛けた時に石手川ダムの前を通ってもらい、見に行きました。とても大きく、その日もたくさんの水が流れていました。こんなに大きいダムがいっぱいになる程の雨が降ったのだと思うと、すごく怖いなど改めて感じました。しかし、このダムのおかげで私達は、毎日不自由なく水を使えているんだとも思いました。

私の家の周りには、みかん畑がたくさんあります。夏の雨が降らない日は、農家の方が毎日のように水やりに来ていました。また、全国に知られている質の良い今治タオルを作るには、工場でたくさんの水が必要です。だから、農業にも工業にも水は必要不可欠で、それらを手に入れ

るためには雨が降らないといけません。

平成六年の夏、空梅雨と猛暑により、深刻な水不足になりました。その時の写真を見ると、石手川ダムの水も減り、私が見た時と比べようもないほど少なく、乾いてひび割れた地面が露出していました。当時の新聞記事には、トイレを流せず我慢したことや、道後温泉の営業時間短縮などが取り上げられていました。このことを話す母は、

「その時は、レストランに行っても紙皿で料理が出てきよったんよ。」と教えてくれました。また父は、

「水がなくて米が作れんかったけん、輸入したタイ米とか食べたことがあったな。」

と言っていました。水が不足すると、いろんな場面で私達の生活に影響が出ます。

学校のトイレや、いろんな場所で「節水」という文字を見かけます。蛇口をひねれば水が出てくるのが当たり前です。「節水」の文字を見ても、この水がなくなってしまうという考えは全くありませんでした。でも、西日本豪雨を経験し、水問題について調べていくうちに、水の貴重さが改めてわかりました。

これからは、普段から節水を心がけたいです。ちよつとした努力ですが、たくさんの人が心がけることで、今後も不自由なく水を使うことができると思います。少しでも多くの人に、水の貴重さを再認識してもらい、節水を心がけてもらいたいです。

入選

「人恵」としての水を誇りに

福岡県

福岡教育大学附属福岡中学校

三年

宇野

誠洋

筑後大堰。潮の干満差日本一の有明海と九州一の大河筑後川をつなぐ福岡の守り神だ。

穏やかに春の陽ざしが降り注ぐ桜満開の三月にここを訪れた。全長五〇〇メートルに五つの巨大なゲートを備え、雄大に広がる筑後平野の農業用水や福岡都市圏二五〇万人の生活用水を安定供給する「利水」と、川の面積を確保して土砂をためずに洪水を防ぎつつ、有明海からの塩水の遡上を防ぐ「治水」の役割を担っている。水位「TP三・一五m」を合い言葉に、前後に重なる二枚のゲートをセンチ単位で上下に動かし流量を調整して、川の水位を一定に保つ。大型モニターや無数のボタンが並ぶ管理所では、最新機器の緻密な計算に加え、熟練職人のような人の経験をもとに的確な判断がなされる。働く人の厳しい眼差しに市民の命を守る覚悟を感じた。

小さなボートで川面からも見学した。閘門という船通しゲートでは、パナマ運河のような二メートルの水のエレベーターを体験した。堅牢な筑後大堰を見上げると、頑丈そうな鉄製のらせん階段がアメ細工のように曲がっていた。昨年令和二年七月豪雨の爪痕だ。

「あの日」私と家族が乗った車は、大雨が降りしきる夜、筑後川の堤防上の道路に入った。暗闇の中、時折街明かりが照らし出す筑後川の豹変した姿に息をのんだ。筑後川の河川敷は、広く緑豊かなゴルフ場なのだが、全てを飲み込むかのように暴れ狂う濁流は、今にも堤防から溢れんばかりの水位で、私達のすぐそばを流れているように見えた。黒くうごめく水面から大きな楠の頂端部が突き出し、かろうじて息をしている。水位はTP八mを超え、県南部の大牟田市では犠牲者が出た。恐ろしい異常気象の体験だった。一方今日の筑後川はとても穏やかだ。少し茶色の水は触るとぬるく、これがあのコップの透き通る水になるのかと驚く。遡上中の大きなボラが船に飛び込んでくるサプライズもあった。

二年前天国に旅立った祖父とよく高良山に登った。四季折々の豊かな自然を感じながら、展望台から筑後平野を見晴らした。ゆったり横たわ

る筑後川と、遠くに広がる有明海が黄金色に美しく輝いていた。

そしてこれ迄訪れた小石原川ダムや寺内ダムのことも思い出した。改めて実感するのは、「私たち市民の安全で安心なくらしのためにそれらすべては存在している」ということだ。そこには最新技術で大自然と共存する工夫を日々真摯に重ねる人達がいた。かつての自然災害という辛い経験が人々の願いを産み、長い年月と労力が結実して施設が形となって、現在私たちにきれいな水が届けられている。そもそも水とは、遙かな時間と空間を超えて母なる地球をめぐる命のエネルギーなのだ。

今も続くコロナ禍においても、私たちは水に支えられている。手洗いやうがいから、重症患者の最後の砦であるECMOに至るまで、清潔な水は欠かせない。これまで罹患率が低かったわが国を支えたのは、清らかな水を産み届ける技術だったのではないだろうか。

ここにきて、異常気象や地下水の枯渇などの問題を通して、水は人類の貴重な資源なのだという認識が高まっている。そもそもどちらも人間が原因なのだから、私たち一人ひとりはこの地球規模の問題の解決策を考え協力して取り組む必要がある。世界の海とつながる筑後川に浮かびつつ、そう考えた。

「天災」を乗り越え「人災」を制御した先に、水という「天恵」がある。そして私はそこに関わる人たちの努力という「人の恵み」に感謝したい。辞書にはない「人恵」という言葉を自分の辞書に加えつつ、帰路についた。

私には将来建築家になるという夢がある。大きな川の恵みのように、人と人をつなぎその暮らしを守る建築を作りたい。そしてありふれてはいるがかけがえのない幸せな日々をそっと支え続けるような人間に成長したい。

入選

水と命

佐賀県 佐賀市立川副中学校 二年 轟 貴博

命を支える水は、時として私達に牙をむくこともある。

昨年、佐賀県を含む九州北部で集中豪雨が発生した。八月二十八日の記録的豪雨は、数十年に一度の災害の恐れがあるとして、佐賀県や福岡県、長崎県に大雨特別警報が発令され「命を守る、最善の行動をとる」警戒レベル五にあたる程だった。その時は、緊急速報メールが鳴り続け、あの音が耳から離れず、不安な日々が続いたことを覚えている。この大雨で、大勢の人が冠水や停電、断水などの被害を受け、大切な命さえも奪われた。今年も同じレベルの大雨が降り、日本各地で被害を受け、長い梅雨となった。この体験を受け、私は天災の恐ろしさを知り、防災の意識が高まった。

その一方、水は全ての生物にとって、必要不可欠な存在である。日本には、川やダムがたくさんあり、降水量も多いので、水資源は豊富だ。そのため、蛇口をひねれば直接飲める程の安全な水が出る。その水は、炊事や洗濯、トイレ、風呂など様々な場面で使われている。このように、どこでも簡単に手に入る水だが、ダムや浄水場、各家庭に送るための配水管などの施設が、きちんと整備されているおかげだということを忘れてはいけない。

しかし、世界には、水不足や衛生事情に苦しむ国が多く、問題となっている。現在、六億六千三百万人もの人々が、安全な水を飲むことができず、池の水や整備されていない井戸から水を汲んで生活している。多くの途上国では、水汲みは子どもの仕事であり、学校に行くことも難しく、不衛生な水のせいで病気や死に至ることも多い。ユニセフでは、きれいな水が使えるように井戸を作り、井戸に汚れた水が入らないようにトイレを作っている。ユニセフ募金は、命を救うために役立っているのだ。

これほど大切な水をどう使っているか。無駄にはしていないだろうか。

私は、二年前からエコ活動に取り組んでいる。きっかけは、エコ自慢コンテンツで入選したことだ。私は「節水」について研究し、ペットボトルを使って、水かさの増加量について調べた。二リットルのペットボトル六本を浴槽に入れることで、十二リットル分の節水ができ、水かさが二センチメートル以上増した。それを一ヶ月続けることで、お風呂二回分の節水ができることが分かった。他にも、トイレのタンクにビール瓶を入れ節水したり、日常生活においても節水を心掛けた。一人ひとりの些細な気遣いが、大きな節水へとつながる。これらのエコ活動は、今後も続けていきたいと思っている。

もしも、世の中から水が全て無くなってしまえば、わずか数日で絶滅してしまうだろう。なぜなら、水は生命の源であるからだ。全ての生物は、水によって生かされている。

過去には、有機水銀による水俣病や、カドミウムによるイタイイタイ病などの有害化学物質による水質汚染が問題とされてきたが、現在は、マイクロプラスチックが原因で海洋汚染を引き起こしている。五ミリメートル以下のプラスチックが、自然界で分解されず留まるため、食物連鎖により体内で悪影響を及ぼしているからだ。これを無くすために、日本でも、紙製ストローやレジ袋有料化などで、プラスチック減量に努めている。私達にできることは、美しい地球を守ることだ。

かけがえのない命を守るためにも、水を大切にしなければならぬ。私達は、水の恵みに感謝し、世界中の皆が支えあって生きるべきである。

「私達の命は、水と共に生きている。」

入選

「世界の命を救う水」

佐賀県 佐賀市立北山中学校 二年 田中 美羽菜

長く続いた梅雨もようやく終わり、青空が広がっている毎日だが、令和二年七月豪雨は、九州、中部、東北地方をはじめ、日本の広い地域において、土砂崩れや河川の氾濫が相次ぎ、多くの死者を出した。人命や家屋への被害のほか、ライフラインや地域の産業等にも甚大な被害をもたらした。

私が住んでいる地域でも一日中雨が降り続く日は何日もあった。学校が休みになるなど、とても不安で怖い豪雨だった。大雨が降ると川が増水し、ダムに流れ込む。私の家の近くには、嘉瀬川ダムがあり、その様子を目のあたりにしている。いつも、何気なく目にする嘉瀬川ダムだが、自宅にあった「嘉瀬川ダム対策協議会記念誌」を読んで、調べてみることにした。そこには、次のような内容が記されていた。

嘉瀬川は、脊振山系に源を発し多くの支流を合わせ、佐賀平野を貫流して有明海に注ぐ、流域面積三百六十八平方キロメートル、流路延長五十七キロメートルの一級河川で、嘉瀬川ダムは、治水、利水及び発電を目的とした佐賀県最大の多目的ダムである。嘉瀬川では、過去に多くの洪水被害が発生しており、洪水調節機能が大きな柱となり、このダムは「百年に一度の大雨」に対応できることになっている。利水ダムの働きとしては、七市町へ供給する農業用水、佐賀市富士町へ供給する水道水、佐賀市、久保田町の工場へ供給する工業用水がある。また、発電は約五千世帯に電力を供給している。

私は、水の恵みによって、人々の生活が豊かになっていくことを知っていた。しかし、この嘉瀬川ダムを建設するために、先祖代々長年住みなれた故郷を離れ、別の場所へ移転しなければならない人もたくさんいた。田んぼや畑、土地を持っている人々の家も、すべてがダムの底に沈んでしまっている。高い山はそのまま残ったが、見慣れた風景は変わってしまったと母は言う。とても寂しく、辛くて何とも言えない気持ちだった

と思う。私の家の田んぼも、いくつかはダムに沈んだと、祖父母から聞いている。

ダムが完成するまでは、何十年もの年月を必要とした。地域の人々は、当然最初は建設に反対した。しかし、最終的には「五十年後百年後の子どもたちが、笑顔で暮らせるように」という思いで、建設が着工したと聞いた。今の自分の生活のことだけでなく、未来の子孫のことを考える。そのためには、「犠牲も仕方がない」ということがあったようだ。私は、百年先のことを考えた地域の人々の思いを受け止め、ダムを見ている。ダムに沈んだ地区に住んでいた人々や、ダム建設を計画した人々、工事をしてくださった方々。たくさんの人たちのおかげで大雨の日にも対応でき、水に不自由することなく生活できている。その方たちに感謝しながら、水を使っていこうと改めて思う。

一方、世界に目を向けると、別の面が見えてくる。日本では、ごく当たり前に使用できている水だが、日本のように水に恵まれた国ばかりではない。逆に、日本の方が特別である。二〇一九年現在、世界では二十億人が、自宅で安全な水が手に入らない状況下にあると言われている。不衛生でも飲み水を確保するため、池や川へ汲みに行かなければならぬ。そのため、下痢や病気になり、命を落とすこともある。また、女性や子どもたちが水汲みの担い手となっている。子どもたちは、本当は学校に通い勉強をしたい気持ちがあると思う。

きれいな水が飲めないということは、衛生面でも教育面でも重大な問題となっている。改善するために、私たちには何ができるのだろうか。そのことを考えながら、水資源を大切に使うことが、世界の水問題を解決していくことにつながる。

入選

水が私に考えさせてくれたこと

熊本県 御船町立御船中学校 三年 寺田 俊太郎

みなさん想像してみてください。みなさんの手にはコップがあります。そのコップに蛇口をひねって水を入れるとき、みなさんはどんな音を想像しますか？

私は「ジャー。」だと思えます。そこで、家族にも同じことを聞いてみました。すると、弟は「ぼちゃん」、祖父は「ドバーツ」母は「シャーツ」父は「じよろろろ」と、みんな全く違うオノマトペが返ってきました。たった一つの水の音に対して、たくさんのおノマトペがありました。

そこで私は、ふと「日本みたいに、英語の水に関するオノマトペはどのようなものがあるのだろう。」と思いました。調べると、弟の「ぼちゃん」と同じ意味の英語のオノマトペは「plop」と表現するということがわかりました。さらに、「ぼとん」「ぼとつ」「ぼとっ」のような水の落ちる音は、すべてこの「plop」で表現されていました。他の言葉でも、英語のオノマトペは似たような日本語のオノマトペをまとめて表現していることがわかりました。比較してみると英語の水に関するオノマトペより、日本語の水に関するオノマトペの種類の方がとても多いのです。

なぜ、日本語の水に関するオノマトペが多いのかを考えてみました。それは日本が身近に水が感じられる環境になっているからだと思います。日本は海に囲まれている島国です。だから海が日本人の暮らしに密接に関わっています。川や滝が至るところにあり、そこから必ず海につながります。海や川には、魚やカニなど水辺で暮らす生物がたくさんいます。私たちは、水辺で獲れたものを食べたり、川で遊んだり、滝を見に行つて涼をとったりなど生活の中に水が深く関わっています。漢字にも、沼、泳、流、漁など水に関する「さんずい」の漢字がたくさんあるのも、水が近くに感じられたからでしょう。

さらに、日本には四季があり、六月になると梅雨の時期を迎えます。そこで私たちは、いろんな雨の表情を見ることができます。例えば、地

面からの跳ね返りで足元がぬれるような強い大粒の「ザーザー」と降る雨、大粒だけど少量ずつ「ばらばら」と降る雨、静かに霧雨のような状態で「しとしと」降る雨。他にもたくさん雨の様子を表現できるはずですが、そこには日本語の情感や繊細さを感じます。

そして、日本人の主食は米です。米を作るためには田んぼに水を張らなければいけません。水を張るためには、山から引いてきた豊富な栄養分をふくんだ水を農業用水として利用しなければいけません。昔から人々の生活と水は深く関わっています。私の住む熊本県も至る所に田んぼがあり、水路の水の音が聞こえてきたり、水に群がる虫を眺めたりすることが出来ます。

私は、この水を感じられる環境がこの国からなくならないようにしたいです。

熊本県は水量の減少や湧水地の枯渇が問題となっています。またほかの県に比べて水の利用率が高いこともその問題に拍車をかけています。

このままでは阿蘇外輪から熊本市まで、約二十年の歳月をかけて磨かれた「蛇口をひねればミネラルウォーター」と言われるほどの地下水がいつか飲めなくなってしまうかもしれません。その問題を解決するため、私は自分の身の回りの事から取り組みたいと思っています。まずは、「水は有限である」ということを自覚する事が大切だと思います。そして、有限な資源を大切に使うために節水を心がけ、実際に実践したいと思います。

けれど、私一人が節水を実践しても私の願いは叶いません。だからこそ私達は水の大切さについて考え、限りある水資源がなくならないよう行動を起こしていくべきなのです。

入選

水の舞台に未来を乗せる

宮崎県 宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校 二年 三浦 世来

『水』というものは、私たちの生活の中に数えきれないほど存在する。お茶や料理、お風呂に水道。また大きく海や川。それはそれは無限大だ。

私が思うに水はいつも脇役だ。水を使った料理でも、水が大多数をしめる洗濯機でさえも、水が主人公になることは一切ない。良い意味では、当たり前になるほど必要とされてる。悪い意味では、根付きすぎて存在自体があやういという感じだろうか。ただ単に、「水の良さを知ってもらおう」というのではなく、水を主人公にしてみてもどうだろうか。

宮崎県の南西部にある小林市には、出の山湧水の採水地がある。出の山湧水は環境省が選定する名水百選に選ばれるほどのものだ。その他にも、市内には約七十五ヶ所もの湧水地があり、「名水のまち」と呼ばれている。これらの豊富な名水を利用し、昭和五十八年から「宮崎県水産試験場小林分場」がチョウザメ研究に取り組んでいる。小林市の水は、チョウザメの養殖に適した水温であり、稚魚期には、地下水を利用することで、悪性の菌を入れることなく、安全に育てる最高の条件のもと成育することができるのだ。平成十六年には、日本で初めてシロチョウザメの完全養殖に成功し、今では小林市の新ご当地グルメとなってる。水を主人公に、進化を続けているのだ。

その一方、忘れてはいけない水が与えた被害がある。それは、東日本大震災だ。二〇一一年三月十一日に発生した東北地方太平洋沖地震による災害。これらによる福島第一原子力発電所事故による災害である。東日本各地での大きな揺れや大津波、火災などにより東北地方を中心に十二都道県で二万二千人余りの死者・行方不明者が発生した。私は、この大震災で忘れられないことがある。それは、十年目を迎えた今年、初めて聞いた宮城県気仙沼市の当時の卒業生の言葉だ。気仙沼市のある中学校は、地震発生当日に卒業式を行うはずだった。何日か後に行われた卒業式で言ったある男性の言葉。それは、「自然の猛威を前に人間の力はあ

まりにも無力であり、私達から大切なものを容赦なく奪っていきました。天が与えた試練というには、惨すぎるものでした。」というものだった。この学校は防災教育に平日頃から力を入れており、内外から高く評価されていた分、大きな悲しみに襲われていると思っていた。

でも、その後の力強く言われた言葉は、私の予想を大きく覆すものだった。「しかし、苦境にあっても天を恨まず運命に耐え、助け合って生きていくことが、これからの私達の使命です。」私は、この言葉を聞いて今までに無いほどの感動を覚えた。現実のつらさを、嫌なほど感じる年代だからこそその思い。そして、今の私達に近い年齢の人達が、考えられないほどの大きなものを背負っていることに、強く衝撃を受けた。ある意味、これは水が主人公となり起きたものだ。

水が主人公になるということは、必ずしも良いことばかりではない。それでも私は、水が与えるものはとても偉大なことだと考えている。地域の発展。また、水害への備え。これらは、私達にとつととても大きな財産だ。水が与える恩恵と悲しみ。恩恵だけでなく、悲しみがあることで、これから先、私達は多くの壁を乗り越えていかなければならない。実際、私達が生きている間に南海トラフ地震が起こると考えられている。未来を生きる次の世代の人々に、未来に、多くのことを継承していくために水の偉大さを感じなければならぬと思う。水が主人公となる舞台の上で、多くの人々が笑顔で、そしてこの国を誇らしく思えるために。

入選

一リットルの水から

フランス サンジョセフ校 三年 中田 柚

ある朝、蛇口をひねってみると水は出てこなかった。もちろん以前から一時間の断水については知らされていたというものの、いざ実際に水が全く出なくなると、予想以上に不便さを痛感した。なぜなら、トイレに行くことはおろか最小限の身だしなみさえ整えられず、たった一時間の断水で、私達の生活にこれほどの支障が生じるのか……と思ったからである。一時間後、再び蛇口をひねると、水は勢い良く流れ、思わず「ああ、良かった」と声を出さずにはいらなかった。安堵感と同時に水のありがたさを思い知り、この体験は私の中にとっても印象深いものとして残った。そして、水と人間の切っても切り離せない関わり合いについて改めて考えるきっかけとなった。

まず、日本と水の関係について調べてみたところ、日本の年間降水量は、世界年平均の約二倍あり、この恵まれた気候によって深刻な水不足に直面することはめったにない。また、私達は豊かな水資源によって、稲作農業を中心とした文化を作り上げ、そして、工業を発達させ、様々な製品を生産することが出来た。日本は、「何不自由なく暮らせる国々」の一つである。

しかし、私達は、自由に水が使える豊かな生活を支えるために、日々大量の水を必要とし、毎年琵琶湖の約三杯分に相当する量の水を消費している事実がある。日本人一人一人が一日で使用する水量は、まずトイレ、風呂、炊事、洗濯といった家庭用水の約二百リットルであり、これは世界平均の二倍という驚くべき量だ。その他に、ホテルや飲食店などで使われる都市活動用水などを含めた生活用水、次に、産業活動で供給する水、工業用水、そして、日本の利用水の中で大半を占める農業用水である。全ての日本国内における年間水使用量は約七百九十三億立方メートルというとても大きい量なのだ。

ところが、私達は日本の水資源をすり減らし続けるだけではもの足り

ず、間接的に世界各国の水を消費している。なぜなら小麦、肉など海外から輸入する物の生産には大量の水が使われており、これらをもし日本で生産するとなれば、毎年、琵琶湖の約一・六杯分の水を使うことになるからだ。

一方で、世界にはかなりの水格差が存在し、水は不平等に分けられ、未だに世界人口の約四十%の人々が安心して飲める水が身近にない生活を強いられている。その上、地球温暖化が加速するにつれ、ますます深刻な水不足に見舞われる地域が増加していく事態になっていく。水の豊かな国に住む私達からすれば自分達には何の関連のない出来事だと捉えがちだが、しかし、それは間違いだ。なぜなら、他国の水をも大量に消費する私達は世界の水問題に関わっているからだ。

それでは一体、私達に出来ることは何だろうか？私達を始め、すべての人々が実践出来る簡単なことがある。それは、今後、このまま私達が何もせずにいると、世界中の地域で水不足の問題が増えるということから目を背けず、私達自身も水不足に直面しつつある事実を知ること、水は無限ではないということを意識すること、そして、自ら、日常生活の中で、水不足対策のために行動を移すことだ。私達一人一人が一日で使う二百リットル以上の生活用水の中から、ほんの一リットルの節水を行うことで、一人年間三百六十五リットルもの水を無駄に使わずにすむのだ。そして、それを皆が実行することによって、限りある水資源を、次世代も継続して使用出来ることにつながる。だから個人個人が、この三つの要素…現状を知ること、意識すること、実際に行動する、ということとを努めることで、水不足問題の壁を少しでも乗り越えられるのではないか。

第43回 全日本中学生



水の作文コンクール



ポケットモンスター
No.134 シワーズ

タイプ 水 特性 ときどきいもすい

水は、地球上の全ての生命の源であり、特に私たちの生活の営みや農業・工業等にとって不可欠なものです。一方、水は、「恵み」の一面もあれば、豪雨や洪水、濁水などの「災い」という一面もあります。また、私たちの暮らしは、水によって支えられています。地球上の水は無限ではありません。私たち一人一人が水循環の重要性を理解し、水との関わり方を学んで、水の恩恵を享受し続けるために、何をすべきか考えることが重要です。あなたにとって、水とはどんなものですか？暮らしの中での体験や授業で学んだこと、調べたことをもとに、水についての考えを作文にまとめてみませんか？

◆メインテーマ

水について考える
(個別の題名は自由)

◆原稿(記述要領)

- ①400字詰原稿用紙4枚以内、日本語で記入された個人作品
- ②本文の前(原稿用紙枠内)に題名、学校名(ふりがな)、学年、氏名(ふりがな)を明記

◆応募締め切り

【国内】各都道府県の水資源担当部局にお問い合わせください
【海外】令和3年5月20日(木)

◆提出先(問い合わせ先)

国土交通省水管理・国土保全局水資源部水資源政策課
〒100-8918東京都千代田区麹町2丁目1番地3号
TEL:03-5253-8386(直通)

◆入賞発表

令和3年7月下旬頃

◆表彰(予定)

- 最優秀賞(内閣総理大臣賞).....1編
- 優秀賞(各大臣賞ほか).....9編
- 入選.....約30編
- 佳作.....約100編

最優秀賞及び優秀賞の受賞者を8月上旬(予定)に東京での表彰式に招待し、賞状等を授与します。また、最優秀賞及び優秀賞の受賞者はダム事務所等の一日事務所長を体験することができます。

【主催】水循環政策本部、国土交通省、都道府県

【後援】文部科学省、厚生労働省、農林水産省、経済産業省、環境省、水の週間実行委員会、独立行政法人水資源機構、全日本中学校長会

8月1日は「水の日」 | 水循環基本法で、8月1日を「水の日」と定めています。8月1日から8月7日は「水の週間」です。

© 2020 Poken. © 1996-2020 Nintendo/Creatures Inc./GAME FREAK Inc. ポケットモンスター、Pokémonは任天堂の登録商標です。

※詳しくは「水の日・水の週間」ホームページ
<http://www.mizunohi.jp>をご覧ください。

水の日 検索



第43回「全日本中学生水の作文コンクール」概要

- 1 応募要領
- ① テーマ・・・「水について考える」（題名は自由）
 - ② 対象・・・中学生（令和3年度に中学校に在学中の者、または、これらの者と
同じ年齢の者を含む）
 - ③ 原稿枚数・・・400字詰原稿用紙4枚以内で日本語により表記された個人作品
 - ④ あて先・・・中学校等の所在する都道府県水資源担当部局、ただし、外国に居住する
者にあつては、国土交通省水管理・国土保全局水資源部
 - ⑤ 応募期間・・・令和3年5月31日までに国土交通省水管理・国土保全局水資源部あて
到着分有効
 - ⑥ 著作権等・・・○応募作品は自作の未発表のものに限る
○応募作品の使用権は、主催者に帰属する
○応募作品の返却は行わない
- 2 審査
- 応募作品13,025編のうち、各都道府県の地方審査を経た186編について国土交通省水資源部による内部審査を行い、中央審査会の対象となる39編を選出。
令和3年6月30日に開催された中央審査会において、最優秀賞1編、優秀賞9編及び入選29編あわせて39編の入賞作文を決定。

3 表彰 (1) 賞および賞品

賞		賞品
最優秀賞	内閣総理大臣賞	賞状、副賞
優秀賞	厚生労働大臣賞	賞状、副賞
	農林水産大臣賞	
	経済産業大臣賞	
	国土交通大臣賞	
	環境大臣賞	
	全日本中学校長会会長賞	
	水の週間実行委員会会長賞	
独立行政法人水資源機構理事長賞		
	中央審査会特別賞	
入選		賞状、副賞

(2) 表彰式 新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言が東京都に発出されたことを受け、最優秀賞の受賞者のみオンラインで表彰式を行いました。

4 中央審査委員（敬称略）

- 熊谷 和哉 内閣官房水循環政策本部事務局参事官：厚生労働省医薬・生活衛生局水道課長
- 豊 輝久 内閣官房水循環政策本部事務局参事官：農林水産省農村振興局整備部水資源課長
- 塩手 能景 内閣官房水循環政策本部事務局参事官：経済産業省経済産業政策局地域経済産業グループ地域産業基盤整備課長
- 森田 健児 内閣官房水循環政策本部事務局参事官：国土交通省大臣官房参事官（水管理・国土保全局担当）
- 筒井 誠二 内閣官房水循環政策本部事務局参事官：環境省水・大気環境局水環境課長
- 宮田 正博 全日本中学校長会編修部長
- 須磨 佳津江 キャスター
- 長崎 宏子 スポーツコンサルタント
- 玉野井 晃 公益社団法人日本水道協会調査部長
- 三輪 準二 独立行政法人水資源機構理事

- 5 主催者等
- 主催：水循環政策本部、国土交通省、都道府県
 後援：文部科学省、厚生労働省、農林水産省、経済産業省、環境省、
 全日本中学校長会、水の週間実行委員会、独立行政法人水資源機構

第43回「全日本中学生水の作文コンクール」地方審査優秀者名簿

番号	都道府県名	氏名	氏名	氏名	氏名	氏名
1	北海道	わたなべ かえで 渡邊 楓				
2	青森県	きや しゅうたろう 木谷 悠太郎	ながね ひな 長根 陽菜	しなだ りんたろう 品田 凜太郎	とのさき あらた 外崎 新	かわむら ゆうま 川村 佑真
3	岩手県	うめむら ことわ 梅村 琴和	えんどう しょうや 遠藤 高也	さとう あやね 佐藤 綾音	はたけやま ふみこ 畠山 史子	みやぎ 祐奈子
4	宮城県	さくらば ひなた 櫻庭 日向	えんどう ゆうま 遠藤 悠馬	こばやし とうこ 小林 橙子		
5	秋田県	さとう りゅうと 佐藤 琉斗	しばた すみれ 柴田 すみれ			
6	山形県					
7	福島県	あおやま きらら 青山 星空	おおわた ひな 大和田 陽奈	さとう そな 佐藤 空成	つかだ はるな 塚田 暖菜	わたなべ さくら 渡邊 さくら
8	茨城県	あみなが りり 網永 莉々	ふじの みゆ 藤野 美唯	やなぎ ゆい 柳田 結衣	ふじしろ かりす 藤代 かりす	ならぶ とわこ 奈良部 十和子
9	栃木県	はやし さゆり 林 咲結理	わしあし ゆうか 鷲足 祐香	ひろせ ののか 廣瀬 乃々佳	かねこ あきね 金子 暁音	かじさ めのこ 加佐佐 梅乃子
10	群馬県	とよだ ふうが 豊田 楓芽	たきざわ みゆう 滝澤 美優	たかはし みおと 高橋 みおと	あまだ さや 天田 ヒカル	さや 矢内 矢内 沙弥
11	埼玉県	あらい みう 新井 海羽	すすき とあ 鈴木 永愛	ちなり ちなり 深井 千愛	はつか あんな 初鹿 杏奈	やまぐち あいか 山口 愛果
12	千葉県	さとう かほ 佐藤 夏帆	ふるき みき 古木 実希	こうやま みお織 神山 実織	たかはし ゆうみ 高橋 優美	おだ たくみ 小田 拓海
13	東京都	さくだ まゆ 福田 万結	さかい 綯 坂井 綯	みこ みる 桑原 弥子	たかい あんな 高井 杏菜	かまた たいき 鎌田 大輝
14	神奈川県	なかい みき 中井 美希	やました りさ 山下 莉采	さとう あかり 佐藤 明莉	みずたに まな 水谷 真菜	くろさわ こころ 黒澤 心
15	新潟県	まつもと るか 松本 琉花	いしばし あおい 碓 碧珠	いべ りゅうのすけ 井辺 龍ノ介	かみむら もあ 上村 萌愛	はが しおり 羽賀 詩彩
16	富山県	いなば ゆいな 稲場 結奈	まきたに ももか 槇谷 百華			
17	石川県					
18	福井県	なかや ゆら 仲谷 優来	ながお るな 長尾 瑠夏	かわむら はるひ 川村 陽日	す み ひより 須見 日依理	まえがわ ほづみ 前川 穂積
19	山梨県	たなか もあ 田中 萌愛	こばやし こころ 小林 こころ	ふかさわ きなり 深沢 生成	わかばやし ゆの 若林 柚希	しらい ほのか 白井 穂花
20	長野県					
21	岐阜県	たじ み ゆな 多治見 友南	のむら みひ 野村 美稀	わかばら ちひろ 若原 千大	わたなべ ゆい 渡邊 有唯	いばらき ことみ 茨木 小都美
22	静岡県	まえじま どう 前島 東悟	いいた かんた 飯田 貫太	たき みのり 瀧 みのり	なかつやま ひいろ 中津山 日彩	やまおか みずき 山岡 瑞
23	愛知県	おおむら ともか 大森 智華	おおわた りこ 大和田 典子	せつ ちみん 薛 知明	なかもら ひかり 中村 光里	むらまつ わかな 村松 和奏
24	三重県	とみなが まお 富永 麻央	ごとう かずは 後藤 和葉	えいふく ほのか 永福 歩暖	おおきた さわ 大北 紗羽	きただ けいしゅう 真田 京愁
25	滋賀県	たかはし あおい 高橋 蒼生	くぼた りょうた 窪田 凌大	とうどう あやな 藤堂 絢凪		
26	京都府	かわきた かな 川北 歌那	まえだ こうたろう 前田 浩太郎	いぐち しんのすけ 井口 慎之介	むらかわ なごみ 村川 和	
27	大阪府	せんごく あおい 仙石 葵衣	よしだ まさき 吉田 磨幸	ふじやま よしき 藤山 ゆかり	きむら よしき 木村 吉希	しらい ことろ 白石 ことろ
28	兵庫県	なかがわ ちよ 中川 千世	こてら らな 小寺 良菜	いのうえ もえ 井上 萌	たけひら さき 竹平 咲希	たぶち きよい 田淵 聖依
29	奈良県	よねだ りの 米田 理乃	こばやし だいご 小林 大悟	ひろた みう 廣谷 美羽	うえだ りこ 植田 莉子	おおや ももり 大矢 桃里
30	和歌山県	しげまつ なつみ 重松 那津実	なかむら ゆづき 中村 柚月	てらだん あいら 寺段 愛良		
31	鳥取県	つがわ ゆい 津川 結依				
32	島根県					
33	岡山県					
34	広島県	うめはら ゆいな 梅原 惟菜	ふくもと こうだい 福本 航大	うしかき ゆい 牛垣 結		
35	山口県	やまざき りか 山下 莉華	やまざき かなで 山崎 佳奏	ほりざわ あかり 堀澤 明香里		
36	徳島県	だん いくみ 段 いくみ	きただ すみれ 真田 重	なかひら もえ 中平 萌	かみふじ ゆきほ 上藤 幸歩	み き そうま 三木 爽真
37	香川県	みぞぐち さくや 溝渕 朔也	はしもと こうた 橋本 康太	みぞぐち まお 溝口 真央		
38	愛媛県	まつぼろ ななみ 松原 七海	いさき つきね 伊崎 月音	あさい かのん 浅井 花音	しのはら ことね 篠原 琴音	むらかみ ちひろ 村上 千紘
39	高知県					
40	福岡県	う の まさひろ 宇野 誠洋	い が さき つよし 伊賀崎 剛	い が さき のぞみ 伊賀崎 望	い で けいこ 井手 慶子	たかまつ さくら 高松 さくら
41	佐賀県	みぞかみ はるか 溝上 陽香	とどろき たかひろ 小島 一悟	とどろき たかひろ 轟 貴博	ななか みうな 田中 美羽菜	あわい りお 粟井 梨央
42	長崎県	こまつ かなこ 小松 奏子	いのうえ みづき 井上 美月	しげやま せな 茂山 聖菜	むらた しほ 村田 詩帆	てらた あい 寺井 愛夏
43	熊本県	てらだ しゅんたろう 寺田 俊太郎	とよなが みる 豊永 はる	もり野 りん 森野 りん	ごとう のあ 後藤 希羽	さかぐち みり 坂口 実
44	大分県	むらかみ はなの 村上 華乃	いとう りの 伊藤 梨乃	たなか さとみ 田中 里実		
45	宮崎県	ながたに かずき 永谷 和希	みうら せいり 三浦 世来	まつやま りあん 松山 璃晏	わ だ なぎさ 和田 渚	おびたに とうこ 帯谷 到子
46	鹿児島県	さげと りょうすけ 下戸 良佑	いさき あさひ 喜禎 あさひ	やまもと さき 山本 咲綺恵	ながた 結夢 永田 結夢	たきもと かえで 滝元 楓
47	沖縄県	こたに あんな 小谷 杏奈	レイファルト かい レイファルト 快	みなみ こうのすけ 南 孝之輔	さくだ ゆい 作田 ゆい	ななか めい 仲地 芽依
48	海外	おおつき こうたろう 大槻 幸太郎	きょう あかり 姜 明莉	こんの ふるな 今野 颯南	たかみ ひろき 高見 祐希	たかわ きょうか 田川 京華
		たむら だいじろう 田村 大二郎	たみざわ のの 丹沢 埜乃	なかつ ゆず 中田 柚	ひだか 理緒 日高 理緒	よしだ かずき 吉田 和熙

(注) 氏名の前の印は、中央審査会における入賞者で、☆は最優秀賞、◎は優秀賞、○は入選

第43回「全日本中学生水の作文コンクール」応募状況

都道府県名	地方審査 優秀者数 (編)	応募学校数	応募総数 (編)			
			1年	2年	3年	
北海道	1	13	185	16	110	59
青森県	5	3	150	14	67	69
岩手県	5	6	24	5	8	11
宮城県	3	5	11	2	1	8
秋田県	2	2	3	0	2	1
山形県	0	0	0	0	0	0
福島県	5	14	414	0	261	153
茨城県	5	11	1,101	340	390	371
栃木県	5	9	270	0	120	150
群馬県	5	6	585	33	212	329
埼玉県	5	8	396	58	41	281
千葉県	5	12	1,031	286	566	28
東京都	5	33	900	419	270	211
神奈川県	5	12	547	292	245	10
新潟県	5	5	65	1	46	18
富山県	2	3	144	85	53	6
石川県	0	0	0	0	0	0
福井県	5	1	36	0	0	36
山梨県	5	2	82	0	46	36
長野県	0	0	0	0	0	0
岐阜県	5	5	37	2	34	1
静岡県	5	13	151	11	124	16
愛知県	5	10	16	2	7	7
三重県	5	4	481	219	220	42
滋賀県	3	3	245	149	96	0
京都府	4	10	618	194	352	72
大阪府	5	18	403	283	29	91
兵庫県	5	5	221	0	124	97
奈良県	5	7	160	23	104	33
和歌山県	3	7	520	133	288	99
鳥取県	1	1	1	0	1	0
島根県	0	0	0	0	0	0
岡山県	0	0	0	0	0	0
広島県	3	6	290	72	84	134
山口県	3	4	28	3	13	12
徳島県	5	6	348	5	219	124
香川県	3	10	54	0	33	21
愛媛県	5	15	286	5	244	37
高知県	0	0	0	0	0	0
福岡県	5	7	577	2	312	263
佐賀県	5	15	245	0	172	73
長崎県	5	4	147	37	43	67
熊本県	5	22	1,635	448	676	511
大分県	3	3	158	0	7	151
宮崎県	5	8	246	83	81	82
鹿児島県	5	8	172	29	86	56
沖縄県	5	11	32	0	24	8
海外	10	4	10	2	5	3
合計	186	351	13,025	3,253	5,816	3,777

「全日本中学生水の作文コンクール」応募状況の推移

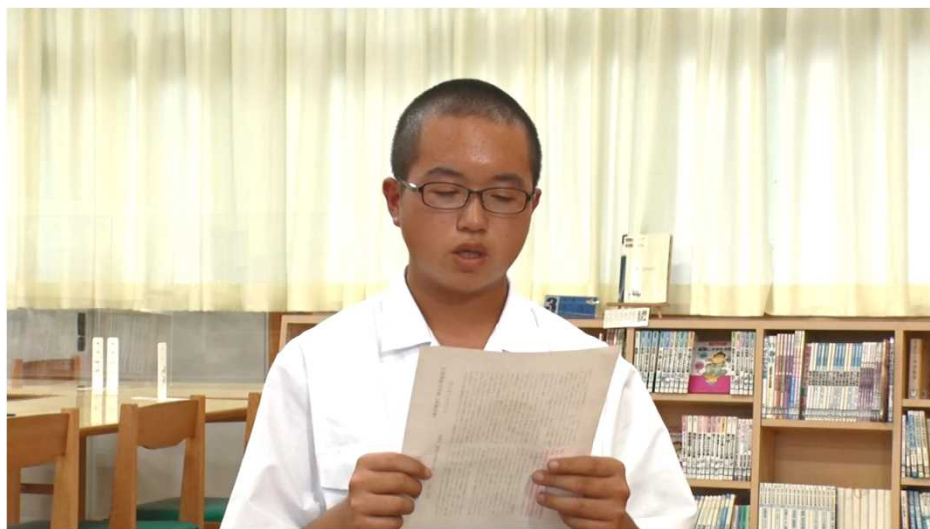
		応募 学校数 (校)	応募 総数 (編)	性別		学年別		
				男	女	1年	2年	3年
				(編)	(編)	(編)	(編)	(編)
第1回	昭和54年	634	4,875	1,878	2,997	1,513	1,710	1,652
第2回	昭和55年	486	3,930	1,446	2,484	1,245	1,462	1,223
第3回	昭和56年	487	5,569	2,159	3,410	2,004	1,974	1,591
第4回	昭和57年	512	5,111	1,878	3,233	1,923	1,848	1,340
第5回	昭和58年	495	4,192	1,435	2,757	1,925	1,214	1,053
第6回	昭和59年	531	7,013	2,905	4,108	2,923	2,115	1,975
第7回	昭和60年	572	9,703	3,676	6,027	3,794	3,647	2,262
第8回	昭和61年	507	7,431	3,080	4,351	2,809	2,680	1,942
第9回	昭和62年	513	9,253	3,789	5,464	4,086	2,935	2,232
第10回	昭和63年	498	10,119	4,233	5,886	4,212	3,501	2,406
第11回	平成元年度	641	13,192	5,601	7,591	5,345	4,392	3,455
第12回	平成2年度	551	11,782	5,320	6,462	5,404	3,549	2,829
第13回	平成3年度	623	12,056	4,834	7,222	5,174	3,821	3,061
第14回	平成4年度	552	12,718	5,332	7,386	4,898	4,533	3,287
第15回	平成5年度	473	13,680	5,340	8,340	4,658	5,024	3,998
第16回	平成6年度	557	13,647	5,591	8,056	5,247	4,577	3,823
第17回	平成7年度	558	15,918	6,617	9,301	5,940	5,388	4,590
第18回	平成8年度	491	15,479	6,595	8,884	5,403	5,606	4,470
第19回	平成9年度	456	13,688	5,731	7,957	5,088	4,792	3,808
第20回	平成10年度	493	13,764	5,935	7,829	4,842	4,609	4,313
第21回	平成11年度	429	11,903	4,971	6,932	4,324	4,059	3,520
第22回	平成12年度	413	14,283	6,288	7,995	4,737	4,968	4,578
第23回	平成13年度	362	11,841	5,131	6,710	3,862	3,844	4,135
第24回	平成14年度	413	13,442	6,159	7,283	4,878	4,691	3,873
第25回	平成15年度	453	13,385	5,980	7,405	4,100	4,618	4,667
第26回	平成16年度	452	16,488			5,595	5,655	5,238
第27回	平成17年度	439	15,726			4,489	6,464	4,773
第28回	平成18年度	373	16,038			5,157	5,811	5,070
第29回	平成19年度	385	16,173			5,242	5,697	5,234
第30回	平成20年度	339	14,927			4,516	5,118	5,293
第31回	平成21年度	344	16,462			4,929	6,038	5,495
第32回	平成22年度	378	16,941			5,592	5,925	5,423
第33回	平成23年度	365	19,618			6,930	6,635	6,052
第34回	平成24年度	368	16,826			4,542	6,692	5,591
第35回	平成25年度	368	18,191			5,564	6,602	5,924
第36回	平成26年度	331	19,419			6,555	7,406	5,365
第37回	平成27年度	345	16,432			5,197	6,949	4,280
第38回	平成28年度	314	15,246			4,533	6,110	4,603
第39回	平成29年度	357	16,725			4,735	6,910	5,080
第40回	平成30年度	314	14,151			4,182	5,750	4,219
第41回	令和元年度	290	12,760			3,584	5,554	3,622
第42回	令和2年度	319	9,444			2,263	4,377	2,801
第43回	令和3年度	351	13,025			3,253	5,816	3,777
合計		19,132	552,566			187,192	201,066	163,923

- (注) ・第10回から海外在住中学生の作文募集を始める。
 ・第26回から作文応募時の性別表記を不要としている。
 (教育現場における男女共同参画社会づくりに向けた取り組みに配慮)
 ・学年未記入者は、第35回101名、第36回93名、第37回6名、第42回3名、第43回179名で学年別集計から除いている。

第43回「全日本中学生水の作文コンクール」表彰式

例年、水の週間中央行事「水を考えるつどい」において、最優秀賞と優秀賞の受賞者の表彰式を行っていますが、今年は新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言が東京都に発出されたことを受け、最優秀賞の受賞者のみオンラインで表彰式を行いました。

また、最優秀作品の朗読については、事前に収録した映像を「水を考えるつどい」の中で、上映しました。(YouTube (MLIT channel) で、令和3年8月下旬に配信予定。)



最優秀作文の朗読（※事前収録の様子）
宮崎県 延岡市立恒富中学校3年 永谷 和希さん
（内閣総理大臣賞受賞者）



オンライン表彰式で赤羽水循環政策担当大臣と記念撮影



国土交通省

Ministry of Land, Infrastructure, Transport and Tourism

国土交通省水管理・国土保全局水資源部

〒100-8918 東京都千代田区霞が関2-1-3

電話 (03) 5253-8111 (代表)

ホームページ

<http://www.mlit.go.jp/mizukokudo/mizsei/index.html>